一和鳥の内にも鶲雲雀百舌鳥なとのちいさき鳥ハ冬も四五日に一度宛吹水用ゆべし天気よく暖なる時計り用申候又此内にも百舌鳥ハ夏なとハ八月頃迄ハ日々吹水のごとくし諸鳥ともに縁なとへ水入付置ハ鳥自分に水あひのまねにあびなとも致てよきものなるべし

但小さき物共まサイの鳥ハ羽裏を薄き鳥ハ乾き故あび過てハ鳥の為に悪し余りあびせぬ様に見斗水入をかけべし

水あび加減の事

一諸鳥共に水ハ五ツ六ツはつきはつきなるべし其内羽ぬけらいけなる時ふくはさき三ばんに位し心得べし

一水あびせ籠へ泊り木二本入泊り木とも水四五分を間揃へ程よく入てそこらの方よりあびるほとの鳥のためよきし心長に待居ば此方より水加ける事あるべし

一ツミ餌喰ぬ鳥の鳥ハ何れも水あびる事好むなりや

一若鳥水をあびさせし振ふ事ある節ハ火にて暖めるハ甚悪し其節ハ手拭へまとひ人の腹にて暖めはやく早速なをる者也

四一　吹水仕方之事

ガラス使用

一吹水ハ鳥を水鉢へうつし鉢を手ニもち先ならハ
日向へ出て鳥をよくあらい口ニ水をふくミ霧の如く
鳥へふきかけるなり
但吹事ハ羽うら荒き毛ニも用る鳥の事也
すかせる時中用ひてよし又水あび兼る鳥ニ
も用るよし

四二　胸打つる鳥煩の事

一諸鳥共ニ胸打つる鳥ハ先角毛ふくれ身胴
気ニおよ糞ニ白き形なき糞ハ多しハ全く
遊きかぬる事也暑気の時分ハ目抔一向ニ塞かたり中
ハ餌をふり喰かぬる事也
但薬ハ薬法の書ニ記し此節即刻雀の生血および
の油の口へ用ゆれハ功験ありされそハ薬用ゆるとも
無益なり

四三　豆気の病の事

赤ひげ、駒鳥、鶲鳥、小るり、磯鵯ハ
サンイ　但かやくりとも云
一右の鳥ニ此病出る事あり又豆気出んとする時ハ
夜ハ口ひらきて豆をふくみたるやう其時節ハ籠の下子
をとり海砂ニ水をふくませてしくなり　尤砂を

背をわへハ病ふせくなるし

ど　但豆気出る時ハ日ニ水あひせへし扨下餌を定餌

の葉のことく守りて飼ふへし下餌強キ時ハ豆気出

るなり又ハ籠掃除悪しき時ハ諸鳥ニ豆気出る有

之

四四　豆気出る鳥料治之事

一諸鳥豆気頻時ハとけくろをあつきかけんニ口の

し目ニ一夜ほと気休盆ら称まて豆気のくへし

又時ニあるハ杏葉の枝にて毛なとをもつて悪血を

とり其治ハ墨をまくる付け置へし石の類ハ砂とし

き置へし

但一族の鳥といめなる鳥まて豆気の療治ハ世嬉

未也又をふしの豆気ハさしてゐる余ニ別条な

き未也又をはくろふしをのワ致し小楊枝まて

付ける事をし好なり

四五　口気の病之事

鳴鳥、大ルリ、ヒタキ類、三光鳥、深山

口田

鶺鴒、小燕鳥

一右の類ハ肴ニ病ニ療治方の出る薬法あり

又をそくさら口付けなきてよし

ガラス使用

但口気出る鳥の類ならハ地餌ほと随分細ニも
べし又ハ口気有ハ不浄の水ニ銀法ケ草ひたし
飼て妙なり又息気ニもよし

四六　筋気の事

一鶏ニ眉筋気出来ルハ首ニかりて見せる者之葉
并病図を用ゆ

四七　鼻気の病の事

一鷹鶏
右両鳥とも何れも痛ニ出る病や外鳥ニなし

四八　胴気之事

一カラクン、金鶏、孔雀、高麗雉類白カン
右何れも第病図用ゆ
但此者多くトシ九、十やも、おやほとなり

四九　羽虫の事

一羽虫出る鳥ハ鶏類、金鶏、孔雀、白鷴、カラクン、雉子類
鶉

一小鳥ハ先自和漢の鳥共ニ常砂浴飼ニ致ニ何れ
もげるもの也無きもハ文鳥錦鶏きん鳩類不及又
九鳥類惣して和鳥唐鳥出来ニ常砂を浴く鳥類ニハ
鳥の糞砂土ニ入しくれるに同ハ虫ニなる物也依之

四月頃より籠掃除二三日ニ一度宛すへし羽虫不出
には
但羽虫の薬色々有之候得共退じ出る共又すればその薬
煎出し洗ひ用る事有之と薬にても不及砂浴候ゆゑ
ハ虫ハ不出ものや砂ニても蟲出る也心得有へし

五口　庭籠内掃除之事

一掃除十日迄ハ巣物なとの為ハ悪し其保ておく
け置也　又年中庭ハ籠へ入置候鳥ならバ十日目
ニ一度ツゝ掃除すへし羽虫も不出ものや又その替る
ハ鳥を揚け置籠へ移しおきて外の庭ハ籠へ入かふへし
すへし

五一　腫むくれ病之事

一四十から山雀ハ、
右の鳥類ハあり又てん称ん相思鳥、鶯、赤髭なとにもまゝ
有る事なり何れも時渡り出来る病なり　惣身の
毛ふくれ肉の間へ水とまりい事なると
但此病直しかたく先づ鳥を吹ならへ尾の上ニ諸鳥
ハことニ脂の如くなるものゝ有り是ハ下穴ト云ふそ
の毛筋を抜きて木をもつて鳥の不痛様に少しく
穴を明けて脂を出しなり鳥さへもあしくトなそ所
ハその所ニも風出なとちる其後ハ即刻

日牛製法　三分　萬金丹　二分

右二味茶研にて細末にして水にときて用ゆる

五二　諸鳥目悪節薬法之事

セキシヤウコン　焼明礬　少し

一右二味煎出して用る事也　尤鳥をおさへて右薬と
紙によく〳〵付て鳥の目内へ薬の志みこむ程二ツ三ツをさゝき
かけべし

一右之如く一廻り程の内ハ日に一度宛用ゆ　右過し其の
内ハ朝夕水の内ニ療治をすへし　又目に雲かゝる
事あり少し鮎の膽を付かくしてよし　一日に二度程なるべし

一大鳥ハ療治ハ常に右のくすり手拭にしめして目
をなでる事

但此病ハ油にて過るなる事ゆへ是も気と同断
なり此時ハ鳥を抑へて胸を吹き三日ニ嘴餌色ニ見ゆる
くすりハまかなひ油にてこゝろえべし　此時ハ水飼

五三　泊木之事

一椶骨木　楊寛木

右二品を諸鳥に用る

一諸鳥泊り木二ツ同様にすへき悪しく其の泊り木を
細く後方の泊り木ハ少し前の方泊り木よりも太き方

ガラス使用

さかり又前の泊り木ハ少しかゞミかけんましてよし

是ハ二ツ葉なとの着鳥なとハ太き泊り木計よし鳥の事也なとハまかりくせ付ものゝ事なり

但塒ハ諸鳥ともに泊り木の間を遠くかけとく事よし

五四　塒之事

一諸鳥ともに塒ハ四月頃より七月頃まて払出物也尤塒ハ早くかゝり出る鳥遅くかゝるもあり何れも其の性による事也又諸鳥ともに塒早く払せけるハよきなり

餌ニ熱ミ有事

但唐鳥抔ハ悪熱して塒を早き者也又備鳥を三十日位まて塒払切る者也尤も塒ハ鷲鳥ともヒタキ類計なり」

一定餌の加減にて諸鳥ともに常に能く飼せハ何れ諸鳥トモに塒ハ早くかゝる者也常に飼方に傳不知人ハ諸鳥ともに塒遅くかゝる者也尤常に飼方不宜き時ハ塒を払兼るの節イタム者也

但弱鳥抔ハ羽の生揃ふ迄其旨の事

七月末より初迄にかゝる者也

一諸鳥ともに塒強くかゝりしも塒傷ともにそれより鳥の差別ハ其の事とも諸鳥丈夫なれ

ガラス使用

得ハ揃ひ時強き者ニ逢ひ少し出合有之鳥ハ時払と
なき者なれと云なるハ右羽なれと持延ル事と
乱られて羽之手の暮なき時致さしい鳥を乱さぬ也
ハあし

但鶯ハ七ツ半九ツハ此数ハ其内時つよき也

五五　留餌之事

一留餌といふハ七ツ半迄鳥を留ル前ニ飼ル事へなめ
餌也云なり留餌ニ飼ル餌ハ鳥の身ニ成るよふ
ニすへき留餌ニ飼ルへハその留餌喰ルへハ其餌
とし鳥を出し留申事也

但留餌ハ常ニ不飼事也鳥の様子ニよりてあし
き時ハ又ハ時中なりとも飼ふべし然しへハ黄なるか
蜘蛛駒ま蟋蟀なとを鳥の好む物を飼ふ
べし也

五六　諸鳥子を産時節之事

一春の彼岸より盛り時ニかけて生る也秋も又彼岸
より鳥ハ生る也又先ハ二番ニ子を生る也
の春より巣作る也

五七　糞にて知る之事

一諸鳥糞にて知るハ摺餌ニて飼ひ粒餌の鳥敷ニ

一まり糞口にとまりて出かねるてか出かねる時は菜切艸
まそにおきて油ひたし紙にまるめ付鳥をおさへ
か肛門へ少し捻り込へ早速通る也

五八　同薬法之事

一土龍　三ト　製法甘艸　二ト
右二味、細末にし一ッ水かみて水入て飼也又糞ハ堅き時もよし
用中

五九　水糞之事

一諸鳥ともに水なる糞をアビタル時ハ随分水糞却ハるへし
事あり不苦又常水糞出るハ腹合悪き也心得
へしそのせる也
セキカウ
右一味、細末にして水入ていたし用中
一諸鳥ともに糞の通し悪き節ハトウガラシ水なる
べし
但トウガラシハ諸鳥の腹中をあたゝめしは者や又ずれ
にハ水日ニ飼ふぐし青糞出る時ハ必ず水をとゞめ
右の時水をまり飼汁ハ二三日飼れハ糞直る也

六〇　雑類之事

一色々之漆塗りなどへかかれ候てとゆるしをかゝすべし

ガラス使用

一小鳥諸鳥共ニ爪のび過キハけがする事有鳥を
押へはさみにて切てせん香を火をつけて血出る
所へおしつけ付れハ即刻血留る者也

一小鳥指を押つめたるハ手拭を水ニしめし押へべし鳥
ニ怪我なし

一諸鳥ともに常の籠掃除志げくすへし臭気なき
やう鳥また別てよく〳〵すへし臭気不出る所の鳥
ハおのつと籠掃除悪しく候へハ臭気出る事なるへし

一籠の内糞ある時ハ桶ニ水を以てなかし下子をとこ板を
よく〳〵あらひ泊り木も水にてあらひ干申へし又雨
天の時ハなをさらハ籠水気無之様手拭にて
よくふくへし又ハ籠の底板を火鉢の火にてとくとあふ
り水をかわかすへし其後鳥を移し候へハ鳥湿気
をうけざるよきなり
但冬ハ雨降りハ別て水あらひせぬ事無用致候此
事ハ湿気を鳥ニ請さするゆへ雨天ときらふなり

一飼鳥と囀ある鳥ハ少し高き所へかけ置事よし

六 一 ばれいの事

一ばれいと云ハ病（蛆）ひらの粉やうに熱して粒餌諸鳥共
ますしぶく用て胸をそこのて糞やうりかすし甚だよく

ガラス使用

口傳

一螽用る事小鳥なれば一羽に螽一疋の割也又ヒヨ鳥くらゐの鳥ならば一羽に螽二疋程之割なれども生きたる螽を注下羽をとり足をば切て餌の上に細くきざみて置飼なり

ばつた虫はきらひとあらば餌の上に掛て飼也

但請るとも黒きばつたなり汁も赤きは不用なり氣性をすごく害事なり

都て虫好鳥類は鶺鴒類、駒鳥類、小ルリ、小まし切、セン二ウ、サヾイ

塩サヾイ、嵩の子、

右の類好む也時中ゟ又ハ餌喰なれども悪敷時分餌の上に置飼也

一粒餌ハ定餌ハ不ありなり類也摺て粒餌の類ハ虫類ハきらふ者也又餌喰悪敷時ハその所にの粒餌を飼ひハ其の粉ナる者也

但粒餌の多清ゟ共に粉子悪敷餌喰不宜時全米粟両品共に飼へしむゟ餌の多ハ引ゟや又小粟米など粉子など能節の奥の手ハ少し口傳あり請る共に粒餌る類なと

其節ハ先ニ皮を用ひれハ一ハ鳥の勢ひ甚よし尤
よるへし

一諸鳥共ニ夜ニ籠せる節ハ暑中たりとも
箱へ入ふたを仕置けとも少しも不苦事也

一粒餌にて飼ふと聞ゆれともそれハ山から、数
多く粒餌にて此る時ハ飼ハ只糞なとつまりなかく
不保なれハ中へ定餌の青菜足斗まぜ餌にて飼へ
し

但昔ハ和鳥諸鳥共ニ先此法斗用ひしなれとも
今にてハ油強者へ糞なとつまりて鳥長く不持
依之中古より粒餌の数ましに菜を用ゆ
る

六二　諸鳥庭籠より揚ケ様之事

一魚を取は様なる網をさして鳥をおさへる事や九折
にもあり

六三　出用て能時節之事

一諸鳥共ニ出ル鳥は籠中にてまき時ハかえて悪く
餌喰なとも悪き時かま又ある事あり飼喰不宜時
分ハ鳥の一株まとんを付んへき事なり又野まて
鳥の好餌飼てなし、たとへハ紫ザイ、ヒガイ、塩ザイ
此類まとかも二ツ程を飼べし赤腹鶫鳥数種鴨

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』 請求記号 特1-1980　ガラス使用

せきれい雛大かい、ルリ、ひたきの鳥ハ蚯蚓小さきハ二
つにきり中蚓ハ一ツ飼ニ盛して細ニ切り餌の上ニ置て
飼事也

一木ツヽキハはさみ虫からのうちを飼ニ盛し
しまかの虫ハけんさきをもて細ニきりて飼ニ盛ら虫も
頭も羽根もとり細ニ切りて飼ふ也

一はくさ雛ニハ蟹を飼ニ盛して飼様何れも同
断

一百舌鳥雛ニハ雀の肉を生ながら雀を目ニ又雀の
生血とよし

一ひわ白雛ニハ粟を飼ニ盛して是を飼ハ引又
水ニ入付置

一豆マハし雛ニハ麻之実飼べし水入ツケん

一熱して定飼なとへハわらじかルイハ粟大豆廻
しふハ麻の実なとを山から同じ雛て粒飼の鳥
雛様子悪しき時ハ飼容不宜ハ其鳥の向きを
粒飼を付べし尤水入付ル也

一蚕海老いろ虫なとの虫ハ諸鳥様子悪しき時用て
剥てよし又蚕ハきりて用ゆべくよし海老つるも
ころ汁用ゆるもよし又ハ細ニ切りまぜ餌上ニ置

て飼ふへし

六四　ゑがら黒焼之事

一摺餌の諸鳥ニ毎日菜切能みゟ志らし取て
定餌粒餌ゟ數日ゟ白粉ハ類ハ虫類よ
む中へ毎日其外の諸鳥ハ猶以悪し餌ハ悪
發様子宜時分の與への事也
但やきゑがらや亦生ミるゑがらを能て丸のまし
其作事ニ差申鉢ニて黒くやく事なると右之
付ゟ則摺餌へ入る事なりも下餌とも
前ニ入とくなり又少鳥ニハ一羽ニゑがら一匙程
保鴨位ニてゑがら二匙の割や又分蝕ほどつかい
と小鳥ニハ分蝕ほと足ひと鳥くらいニて二匙割や

六五　諸鳥寒暑心得之事

一寒中ニハ一二ヶ日も下餌上けてよし又暑中ニハ
ねこ口傳なし暑中ハ諸鳥とも其樹の時節なれ
樹中の手當まてねこ口傳なし

六六　諸鳥はすゞき上る事

一諸鳥共ニ樹後一年ニ一度ハ必はすゞきを上く
べし
但はすゞき共ニ其鳥の足の反を起る事之　九〇

伝侍り

六七　餌離れの事

一諸鳥ともに餌はなれして暑中に餌を不喰事あり其節ハ虫を留餌のごとくにして飼ふてよし又生ぐさき物よし水有る鳥ハ水入に入れ置てよし吹水いたし候事又は風の通らぬ所へ置事よし

但餌はなれせる鳥ハれんじやく大るり、鵐類、ヒタキ類、三光鳥右の鳥ハ何れも暑の時分に虫をまぜし餌をよくねさし事有べしや

一諸鳥ともに樹より落し雛ハ囀なれども格にもや係しおかりば、鶉抔ハきくづる者なり

六八　唐鳥の事

一唐鳥類ハ都て和鳥ともちがひ且強きものや定餌のかまへ種子（除）悪き時ハ其内にか傳なまし

但珊瑚ヒイチイ雌雄鳥ハ唐鳥の内にて別て守りがたき事也

六九　和鳥の事

一和鳥ハ堪（揺）して諸鳥共に唐鳥類とも通ひ易くま

ガラス使用

されハ和鳥の内にても別て飼の六ケ敷鳥サゞイ
せんまり菊戴叶鳥抔目細まとし相葉抔る
いまて飼方六ケ敷鳥なれと右之共鳥の飼
方ハ伝来すなハり和鳥とも此外の通り白鳥、黒いつ
れもまへて請る也とも定飼三四ケ冬の鳥共ハ
一味も諸く定飼のかよて傳なし
七〇　和鳥并火鉢を置鳥之事
一サゞイ、ハとし切、目細、菊戴ミ寒る叶鳥共
右此鳥なり兎角此鳥ハ寒さをいとひ防くべし
七一　唐鳥并火鉢置鳥并定飼の事

一インコ、ルイ不利鳩九鳥不利文鳥、十姉妹、紅雀、かな
りや、じゃかうねし、黒鳥、ダンドク、きんけら、いんま
ま、せきすべし
右之鳥共ハ国より其内ニも別て寒九国より八
かなりや、紅雀、長尾鳩、金鳩なとハ是ハ別て寒
気を防くべし火鉢置ても寒をふせぎ本とも寒ニ外鳥
ハ火鉢ありも不及
但和鳥唐鳥共ニ火鉢置所とふ鳥の数ニ応別
て寒気を防くべし又火鉢ニて炭火を用事
もないなし座敷の真中へ火鉢を出しておくへし

ガラス使用

二三音程ハ宜きよし
一右の唐鳥数品ハ砂を防のため籠の内砂なしにて
其中粒の皮粒糠なとをこれを砂の代りにて致置事
也又鳥十姉妹抔の小鳥ハ常に菜葉にて巣を
作り雛のともみへ鈎足を見ると則宜きを置て
防くなるべし
七二　音呼数餌飼之事
一白音呼青音呼、ヨシム
右の数定餌黍粒常に水入菜の茎二三りにて
其後程西代の種飼合て あむ物とよし

多の飼ふよし此分ニ傳なし
七三　赤音呼の分の事
一緋音呼、五色音呼、七色音呼、サトウ鳥、此類の音呼
ハなり餌なるべくて赤毛の音呼数ハ摺餌にて飼也
心得べし其内にも赤青かい音呼あり餌也
一右赤毛の音呼数定餌鮒五分米の粉一匁も青こ
入れ何れを白かゆうへてトロトト称りて飼也
但粒餌の音呼数ては不残いのかゆりにて西代の種
餌の音呼数にても不用此数様子悪き時ハ其
できるハも玉子のきみ様子右五色留餌にて

ガラス使用

用ゆ又サヤウ鳥ニハ吹水として冬ハいづれも籾殻
置くや又餌ナドフリかけて孫子の水総楊枝の先ニて
飼ふべし

七四　和漢鳩九鳥類之定餌の事

一諸の鳩九鳥ともに定餌ハ都て黍一升ニ黒米二合
交の割ニ飼ふべしむかしハ細末ニ菜水入まぜこし
日々年中飼や又肉ニなりおち過りて病気悪き節
ハ兎も角黍常ニ交せて飼事とし　粟子なども
添へし定餌ニ添ても常ニ彼米白ハ全九鳥ニ
鳩ニおいハ別て悪くりとサウリ豆気出るやうに心得べし

又いまる鳩ハ阿蘭陀鳩并ニ鳩ハ鳩類之
内ニて別て強キ鳥由黍斗ニて飼事とし　又青
九鳥ハ小豆を甚好むかし悪しき時ハ飼ふべし
一挽割蕎麦を却て九鳥類肉など引て用なれば
少しも節飼て別てよし
一挽割蕎麦ハ九鳥類并雀食鶏類ニ定餌ニかへ
て用てよし　都て挽餌の雀鳥鳩共ニも不用

七五　同小鳥唐鳥の部

一文鳥ナ姉妹かちらや紅雀じやガタラ、ハき鳥、ダレドク
キヱムシ、ヒイニス、セヰハじやク

一粟籾水付置年中の宍餌ニも右日〻入れハ砂上ニ
ならし置ト一日ニ三度宛飼又水ハ水菜細ニし
て日〻飼

但粟斗喰候ハヽ粟籾ハ三合の割ニ而飼へし

又肉折引て毟り悪しき節ハ粟籾斗ニ而添
はやく多く交せ飼様ニすれハ早速宍餌
ニ成るへし

一粟穂、黒米籾
右三品ハ粟類ニて尤巻餌の諸鳥ニよろし肉を
付候し元気を付候る事故常ニ多く加へハ諸
鳥ニ而も目ニまハり是元気出る事心得へし
孔雀、白鷴、金鶏、雉子類志ゆこ、せんにん、
からむ

一宍餌黒米ニよろし搗ぬき蕎麦小ぬかニよろし籾
右宍餌ニも水入付置ても右日〻飼へし
粟籾の外ハ三合の割ニ交せ飼へし籾ハ咽へかゝ
へる事ゆへ是略し飼ハよろし
但から餌日〻可飼鳥の為ニよし喰せ候時ハ三合
日を間を置又日〻飼へし

一孔雀等ハ餌のすり切りて搗かて粒餌と一下包丸

入置や孔雀ハ餌ニ付ける鳥共へなるべし

七六　孔雀の子飼立之事

一右鳥親子飼か又何れも孔雀同然ニなる餌用
ハ丸なる餌の上ニ黒鶏ふり立せ置飼事　一春子
ハまづ十月頃迄なる餌ニ而飼事也

一十月頃分立粒餌を飼先ニ付る餌を飼也

一春子の内ハ蚕蛹留餌ニ十日程ツヽ毎日飼無しても
青ら虫ハ無用なる蚕之外虫類子の内用ひ候へハ犯
虫子相染いて病出る事有由へ甚よろしからぬ事也
丸二年よりハ青ら虫をも用てよし

一白鷴、金鶏、銀鶏、雉子、鷭、カラくヽ、ミヤコ、セイラン
右何れも孔雀の子を飼かけ同断なるべし

七七　なる餌拵へ様之事

一鮒並ニ餌ドシて青ミ入常の摺餌の如く拵いて
其後ニ米黍の色入青菜細くして刻いて餌の
なるくと摺くへて小拵て飼べし

一右なる餌喰兼候て　二三日も右の餌を引又
飼ゆ餌ハ喰ものや　又一日二日置ニ飼てもよし

一孔雀、白鷴、
右の両鳥ともニ年中日々青ら十三四疋ツヽを飼べし

ガラス使用

尤塒中も同断也又塒中螽ならハ十四五疋飼
強し尤螽飼ひ候ハゝ常ハまて不及併三日ニ[illegible]
用ひて常ハ五日ニ一度なとハ飼ふへし
一春子ハ深く夕留ハ節庭籠へ入れ置て吹
水をも与り尤食おそくしても吹水まく事あり
但春子の内ハ右之如く日ニ留ハ五節致しかならす尤
其甚しきハ伏込ハ如此呑水なとニ罷まはなりてハ
喉ニハ不可尤此類何れも孵産の子同断也
一孔雀白鷴の外ハ年中常ニ飼ル事ニ三り又一落
常ニをさし数を五疋なと飼ふへし尤塒の時ハ[illegible]
日〻螽六疋ほと飼ふへし
一右何も大鳥ゆへ多く生れさるを丸して飼事也
一此類の鳥多く留ル事ハ少くはやめニ留へし諸鳥
留ル事廿ハ以来時迄ニも留ルツヽ此鳥類ハ七ツ
過ハ留へし
但此類留時分ハ未タ目迄留不申思ハれも
飛廻り羽打ル事も有之や
一常ニ螽共ニ飼事平日塒中共ニ兎角留餌ニ
飼事なれと

七八　産巣庭籠の心得之事

ガラス使用

一巣物諸鳥ともニ大なる物音致ス事甚く
きらふ事也巣付たる鳥を巣離れさするなり
一庭籠向ハ南の方向き別て宜し冬抔ハ暖ニて
年中庭籠ハ放し候ても南向宜し
一巣物庭籠へ放し候内ハ庭籠掃除悪しく
手をつけ申間や巣子之有親鳥を揚候て
即刻庭籠内とく掃除致し
但庭籠内掃除致候て又鳥を放し候て二番
子営ミニ在しぬく致スを放し候と二番子生ル
一唐鳥ハ都て諸鳥共強く候得共風意ニ致し

此事ニおゐてハ胸をうち死ス事多し其養生の
書ニ薬ゆへ即刻用候得ハ薬よりも人参水飼候へ
ハ早速ニ快する也
一和鳥唐鳥諸鳥共ニ夜分燈さし又ハ蝋燭を置
事悪し夜分ハ諸鳥共ニ目不見故胸打死なり
七九　文鳥の事
一此鳥嘴の赤所色替りたるニ白く相成申候事
あり甚弱養生之事
八〇　諸鳥患養之事
一右用ひ方ハ又人参一分ほど煎じ出し水かへ加て

ガラス使用

並かと飼置し

八一　玉子詰り鳥の事

一十姉妹、かしドリ、長生鳩、金鳩

右の鳥類ニ有り意外の鳥ニも有へし

但し呆法紙ニ包ミし胡麻の油嘴へ付候へハ早速玉子産物也又人参水ニ付置かけ

一玉子詰りの鳥の様子ハふくれ候て籠ニても庭ハ就ても兎角其の所ニ居而胸揚をおこる様子見へ申者也

八二　嶋鴨之事

一鷽抔ハ飼ハ煉り飼ニ而諸鳥ニ準し随分堅くかへるのハ様ニ練り申候也尤此分ニハ年中其ニなりなるとも水の付る也

但右ニ飼を嘴ニて喰ひ候て口へなけ込申也飼かへ候故へかゐるを水へ付る事也又鷽鳥飼の口嘴へ付ル事を嫌きるふるゑ候て飼をふりこぼし鷽ハ世ニ而其飼多しハ所ニへちらし申者也まうく又黄鳥、梅花ヒイチイリ又嶋鴨同断

八三　相思鳥の事

一鷽も諸鳥ニ準し飼ヲ其とも喰由ニ依つて飼

ガラス使用

の祢りかけん申るにまして右ハ両鳥共ニ音併致し餌
の祢りかけん書面ニぬき口傳仕り外鳥ハ和鳥唐
鳥共ニ摺り餌の祢りかけん何れも同様ニてよろし
こる口傳なし

八四　胸ニ餌を持鳥の事

一文鳥、うんじやく、長生鳩
鸚鵡ニ有る事多し外鳥ニハ先世ニ有之も甚節
ハ肉をとかしてよし

八五　同薬法之事

一生ひやからし水又ハ水銀螺煎出し用てよし尤一七
用ゆ

八六　諸鳥ニ餌喰ハ時刻の事

一和鳥唐鳥抔ニハ諸鳥共ニ腹ニて朝五ツ前ニ
ハ餌喰ニ移るや依て朝ハ五ツ時ニまでゞニハ餌を
附ニへし暑中寒中ニよる刻て刻限をとれ候ては甚
ころの病ニなりうるものなり

一諸鳥共ニ足不能ニ付て鶏癰節の事

一諸鳥妙薬萬病圓
右ニ致用てよし
又法

一萬病圓二分　鉄粉甘草三分
右水にて飼草ニとかし
但ギバハ萬病丹製法甘艸ばかり少し薬研にて抹し用ゆ

八七　常ニ心得之事

一諸鳥ともニ常に鳥ハ心を付て見べき事なり糞
にも心を付てらんべし尤先なると有るは通申ニ倂べし
る諸鳥共ニ糞やわらかにして好ましく青糞なら
肉のたき道るゝ血糞ハ胸ニおゐてよろしからぬ也
堅くかたくしまるハ腹中下餌抔強てをかる心な
りと常ハ下餌をすゝげべし又久しく小鳥留ハ持ぬを餌の
喰か減多少ニよりて心を付け餌少き時ハ鳥ニ心を付け
餌をとかけんなるべし
但病と少しみえなる内ニ療治せされハ不直なる
者也又申ニ倂しる少しの下餌の外ニ加減なる
事都て悪しきる童成きゝふ事なり又様子悪
しき時下餌かけんしてとまかね者や

八八　諸鳥早鳴仕掛様之事

一鶯の早鳴仕かけ様来の春ニ細ニかたく鶯室中
ニと囀出来ぬや鶯のごとく頬白赤鬚ぎいい何も
囀なる分ハ何ぞまでと鶯の如し夜飼されハ

ガラス使用

寄中よりも囀出来るもの也

八八　頬白附子仕様之事

一　当春の子ハ二度ニ宜しき歌鳥ニ付る事也　四月頃よ
り宜しき歌鳥の囀のきかせる事之　座敷へ
て五十日程きかせべし来春ニなりて附る囀
となり

但歌鳥の方を向て附子の方を外家ニ而障子
を差て歌鳥の向へならべ置もの座敷内ニ仕
切りあるハ悪しき四方引もはなしておくべし
歌鳥ハ附子のむかふへ置なり歌鳥ハ外家の上ニの
置也　鶯も遠山なる白ハ歌ニ附鳥に有也　此外
口傳あるべし

九〇　秋風の事

一　秋の西風涼気風ハ諸鳥へ不当様ニすべし　それ
めなる鳥ハ軽きに羽てきる事あり羽裏ニ浮き
鳥軽ならバ外家ニ囲置べし

但秋の西風をきらふ事ハ諸鳥ともに時節
時ハ諸鳥共ニ大雛までも病後の形ニ入
きるなり

九一　物ニ驚たるとりの事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980　ガラス使用

一諸鳥共ニ籠抔落るか又ハ物音抔ニ驚きたる節ハまへて息切りてあらき者也其節ハ早速吹水ニて駒鳥類ならハ蚓留餌の如くニして飼候て其上ニて蜘蛛何ても其鳥の好者を飼也

九二　水鳥類の事

一水鳥類ハ桝中抔刻て川藻飼てよし又稗飼申候類ハ熱湯して稗三四日ほと水ニ付灰汁氣出して飼へし灰汁氣ぬけ候ハ稗ニ附而あしく又ハ鳥ハ肉痩るもの也水海老飼てよし海老も同断よし

九三　諸鳥餌入れの事

一諸鳥ニハ長き餌入れ竹ニて拵へたるを用てよし竹ハ水を引抔ハ瀬戸物かねの引藥なとあり其外物ハ各用てよし

但諸鳥ニハ長き餌是石ニかけハ事抔ハ悪し且羽抔出る鳥類ある間て見るへし此を餌入れへ餌を交抔付ケへし大様世話して餌入ニ豆抔入れよや

一竹の餌入ニまいて上ニ取手を付一寸ほとの様ニ付けお

一 くゞし又瀬戸物ニ而餌入の上ニ鳥ハ籠口のまみ
のかしよき餌入より二三寸高く泊木を渡すへく
へし
但餌ふしを付るときハ此両様の事也
九四　諸鳥へ年中餌向心得之事
一 五月頃より飼きらる餌益あらしく擂へ
すとし諸鳥ニ餌也又九月頃ニ而右之如く
致してよし
一 諸鳥やしなうより餌十月中頃ニ飼日の餌今迄
より殺きして明朝水をくゞらせて諸鳥ニ餌
一 てらし尤右の如く正月末頃まで致しにて不苦も
後ハ又毎朝まうなるよ
九五　諸鳥尾羽根抜擂りの時の事
一 諸鳥共ニ尾羽ぬけかへる昔ハ時々鳥をおきぬく
べし羽抜ゆく早速生るもの也のせるままにて
時けなる毛も又ぬく
九六　諸鳥様子悪敷餌様喰悪き時の
心得之事
一 諸鳥共ニ様子悪しき時ハ常ニ出黒やせまして
もみ穀ねとて又ハ内蔵うつるる大豆の粉抜ニ而飼

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』 請求記号 特1-1980　ガラス使用

いとと兎角まよるの様子勢ひ直りかまひ日く
まり餌をかへ飼くむ薬水を用ゆべし
但餌くひ悪しき時ハ大根おろし汁吹き入
し又大根葉にて餌をすらい方別てよし大
根に肉をたくさんかけよし

九七　荒鳥の事

一諸鳥ともに荒鳥ハ日向にて日ごと水浴びさせかべ志
つかにするなり水浴びして後にて吹水致し用ゆハ
拾飼ふ鳥ハつけすへ可なるなり

九八　蚊を防ぐ事

一諸鳥共に蚊ハ食ひ構不申ものかし掛中杯赤はぎ
杯に出来ものうハ蚊を防べし又鳥の日杯刺事もあ
るなり

九九　冬寒気防鳥の事

一冬ハ寒気を防ぐ鳥類ハ和鳥唐鳥共に数々
四時須まで天日に当りさし也然日長く日に当
てハ事ハ悪しきは内にて大鉢を置散らし別てよ
き事也尤外家に鳥を入れ前に障子をさし日
内に出置ハなり和鳥ハそれにさし切せんよう
用ひそれより時鳥類大なり教ふ唐鳥ハ

多く長生鳥類別て和漢の諸鳥共よろし

一〇。 稗并唐鳥粒餌の類諸鳥飼掛
の事

一多鳥類不残鳩類不残熟して粒餌の諸鳥
ハ糞詰りおこる事中へ何れも細く菜水など
て年中飼へし暑中ハ猶更別て飼へしき事なり
尤日々用ひ候方よし
但多鳥類の鳥ハ嘴詰り候者中へ水かけて菜
飼ひてハ嘴へ菜つまり候故きらひ申菜喰兼る事
有り依之細かく菜水かけてあらひ申別の餌なす
菜とつまみ入て飼へしむ和鳥も粒餌にて飼ふ
ハ都て日ニ菜細くきして飼ハヘハ糞つまりなし

一熟じて粒餌斗にて喰候類諸鳥ハ則三四ト の弱
餌まて飼なりむかを絶しまさ山から、あさから熟して
て有るハ摺り粒餌と喰又蜘蛛なり候虫蚕
抔喰申候物類共強餌なり

一諸鳥共ニ野にて虫類喰候ものハ強餌にて飼ひ
やむ五ト以上の餌を強餌ならふ又五ト以下の
餌弱餌なり

一ロ一 諸鳥下餌摺下ケの心得の事

ガラス使用

一諸鳥共ニ時候又ハ様子悪敷時ハまをとし下餌
与いて先般ニ又一二分程上ケへし下ケハ節と日一
分程下ケへし一分ニ上ケ一分ニ下餌を下ハ事悪
此心得無し

一〇二　和鳥類菓子飼立の事

一さゞい鶯小とし切、脊黒せきれい、目細、キビタキ
の子、百舌鳥、類ハ小るり、鵯、大るり
右の類ハ何れも跡半分餌ニして飼立るなり
一鶺白類、雲雀、野じこ、神子鳥、赤鶲
右の類ハ釈鳥定飼跡三分ニ依りて菓子の
内ハ跡六分餌ニして飼立る事やむ菓子の餌青
み入れる事なり
一菓子の餌飼ハ蘇香一分米ニ一口兄大口ニして飼へし
九餌一下喰ハ下直ニ糞とらやその糞ハ直を
取捨へし
一摺餌少し堅く練り申ちへらの先へ餌をつけ
水を一寸つけ申して飼事や右の如く菓の頃ニ
てハ蘇香をね半立きらんて一口兄飼なるし
一羽根出揃ハて籠移ハて定餌ニ直しい事
一籠ん移し渡り木ニ子ほ八餌かけ思ひ移しの外とむ

魚らのゑへ餌をかけて多ク喰ならハよし

一〇三　山雀類の鳥の事

一搗て山がら、四十から、五十から、ひがら、何も世ん雀
小雀

一右の類搗ニて飼ふてハすりかきよれ可なれ之
皆甘き物を甚好喰ます又菊戴鳥なれば右の両ニ
ミかん好む者也

一〇四　鶲の事

一鶲ハ時（塒）中ハ都て諸鳥共ニ用る事甚迄とし時（塒）
とはやく松や摺餌鳥ま摺餌の中へ入又鶏類

鳥鴨類ならハ塒中ハ六ツ七ツ分蛙丸の侭ニて飼
べし

一粒餌類の鳥諸鳥共ニ長く飼可申と思
て摺餌ニして飼ひし粒餌ニてハ長く不持也
但粒餌鳥ハ甚其抔誘り死事多し此書の前ニも
有之ハ迺粒餌をもて飼てハ何れの鳥もそと年
中日ゝ細し菜飼ハ時ハ甚と詰り不申ならし持
なり

一〇五　弱りたる鳥類塒中心得并水あ
ひせ心得の事

ガラス使用

一サヾイ菊戴ハ小をし切、目細、せんまう、此鳥数
右の数何れも弱き数也兎角何鳥も羽裏ゟ
く弱めなるものハ塒中渡まても増餌の加減
塒後二廻り位を塒中の通りにして飼益し
さて其後次第く日増にて餌を下方益し又
最を吹水のかくとし

一〇六　鳥形にて飼掛口傳之事

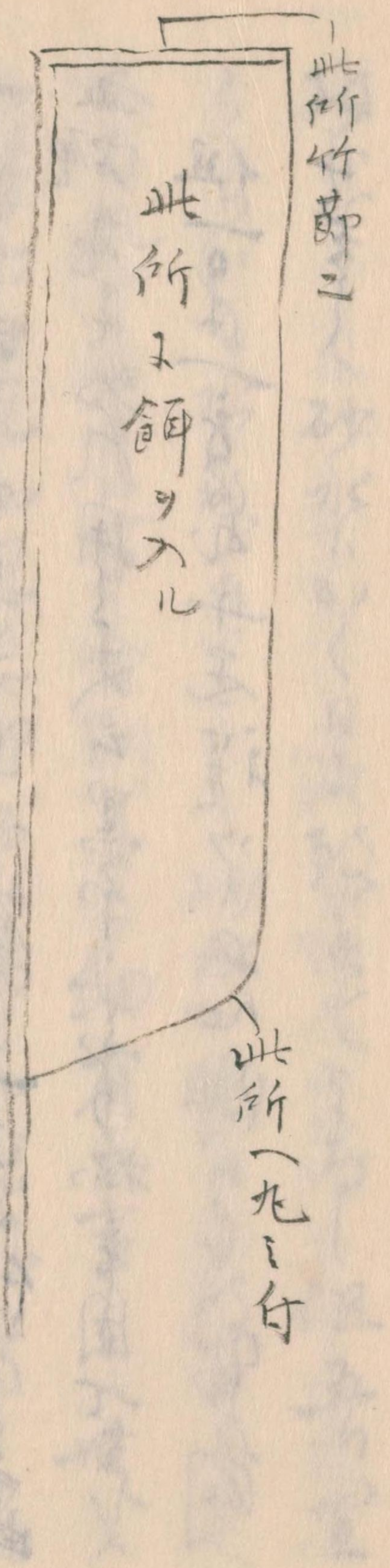
一和鳥唐鳥諸鳥共ニ其鳥の形にて餌まし
餌加減ハ知る者也殊にハ和鳥にて云ふて七八数
ハ嘴短く詰ル形也是ハ諸鳥共ニ野まてハ粒餌
数喰ふ鳥也依て鮒三四分位まて飼てよし様子悪
き時ハ呑びはや心得べし又嘴細くながき鳥数は
て虫好と心得へし其心得まて飼立益し又鳥形
も少さく羽根を荒く嘴も細くなかくして強餌
必心得益し也飼ふ人この心得にてハタトエバサヾイ
せんまう、ヒタキ数杯目光ましても飼立ハ事も有之
駒鳥類を目光まして飼ふ事を教え求れ
とんの所也
右の如く定を付申処上ニタトエ不知鳥まても飼方
不定なる事なし

一〇七　割餌の仕方之事

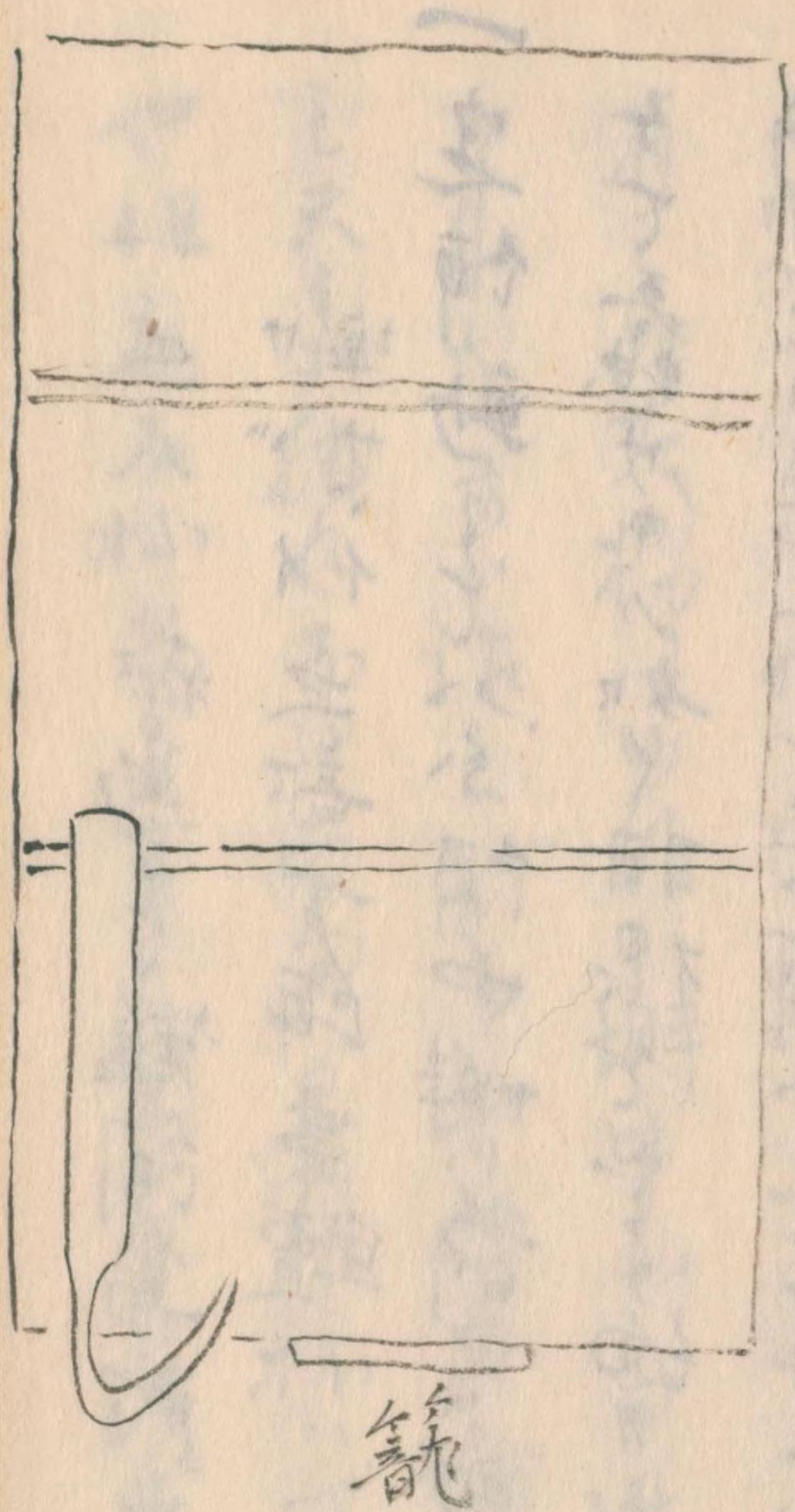
一割餌と云ハ雌より取り立ニ荒鳥を餌付法
なき時ハ餌を殺し餌の上へ生鳥ならバ蜘蛛二ッ
三ッおくべし動きまハる蚓細くきり虫の好者を置
て喰ならハ吉事也

一割餌ハ竹ニて拵ル也竹ハ切口ニ而後壱寸位の所を
二ッ割まして其中へ摺餌をつれ泊り木の上へ掛て
餌ちり又そこてねらすちらすて泊木へもとまらざれ鳥ハ下
籠の下手の上ニ竹を置餌ならハ丸割餌抔拵様
同仕掛様左之如く

割餌竹の図之事


此所竹節之
此所ヨ餌ヲ入ル
此所ヘ丸ミ付
此所長サ三寸斗内
三分斗厚サ五リン位
ニ九此所ヘ竹のミナ
イ候様ニ拵ル也

同籠ニ仕掛様の図



一〇八　和鳥にて雑飼鳥数口傳之事

塩サヾイ（サザイ）之部　下餌串鱣

一定餌鮒にて八分餌や時前に成は先当分餌上ケて冬虫サキの如く羽根を出り細かにして下餌をも前より甚上にて下餌少しより交せ用る切能る事先に同じ尤も又鳥に応じ一方の餌に冬蛙五種類を入れ用る又云黒ありふり抔を用てよし

但一日に一度ずつ十足程の心得にて留飼てよし

一水鉢はまたをのぶんかなく二日めど羽根の差出是不申程に吹水にて致してよろし但五月過くらいに水鉢にてよし砂水はかく早に致してよろし但五月過くらいは水鉢がてよし砂（石）水は陽日に致てよし

又寒風に当ては事全別にて細有之事には殊にい得共西風北風の節抔は陽気涼風当り次第時分にしては風雨に悪くて鳥こされ肉落は事有之候大概にいたし時中秋の申殊の外六ケ敷来大方は治しがたき者也勿論東風の節抔も又天気晴れ不申者は暑中抔は風にあてぬは事や但夜分抔当る事を宜敷い乃無之夜中にまとし部

ガラス使用

ていてよろしからん霜とも四日迄あていて
置しまて又きらばり少時揚けて水三日くら
いは飲ずて宜敷ならせん少しあらばよき時分
水を引けてよろし此節より鈴鐘ハ引け餌を
又ハ分けて庭へしり事なべて諸鳥共増ますばり
を揚けて籠ハ分けまぬけ事や又京ハ月末九月
時より時揚けても強風の当らぬやうにいたし
置く事や

一寒中年当又ハ立前に成ハ十四五日前より当分
小餌揚け事也時節よりは百日も前より揚けや

一水こえハ五節ハ廿日くらいまでよろし志かしなつの
時節ちがひ暑きりハあくこのかる日止せん
とあじりて餌程にあじせてよし去益前の内水
飲けてよし

一様子揃いしき節ろくじつる虫揃二ツ三ツまきたし
風る事蜘蛛をよろしきもの様子よろしく早速に
病ニハかまくいろニ病図諸鳥熱薬揃用てよし
是又なべて諸鳥に病早速まるへ飲時ニ右ニ
薬用ていよし

一字年音出をせぬ事鳴きべき少ゆきまでに三四日程前

ガラス使用

とき餌拵も常のとほりにて強き心持にて用ひ玉子の黄身先少し入三四日程の内日増に玉子の黄身少しつゝ増三四日目に大きなる蜆貝に盃程として用る尤も其後とも夜飼致候時萬事同しく鶯の所記を右之通ニ致し候へハ音出る事六八日の内にて出るなり必音出る者也

一ゝ九　ひのら、小のら、あとりが之部　下飼鮒粉

一 定飼ハ鮒にて七ト餌但くるとみのや尤一明分の餌にくるみ下粉の心得すへし

一 時前になりハ定餌にてましハ分餌と致し候事

但し右蛆虫の如くにしてつくる　やまがら飼かた常に手紫先の通りにて宜しきのしなれとも此の通り暑中南風節に夜分風にあて候事抔ハ及び不申事に而秋風ハ余り強くあたり不申様致候事是又諸鳥共に秋風を不宜事也

一 寒中手當先き氷をやぶり井の通りにてとるへし　随分暖気なる五日目くらいに水あびせてよし勿論いつとも飛せし通り随分暖なる日昼前に水あびせてよし昼過は入ト日当りうすく候事へ諸鳥共寒中昼過にて水ハ甚あしく此義とくと相心得候事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』 請求記号 特1-1980　ガラス使用

一一ハ　四十雀、山から、あいせん雀ら部　（下餌鮒粉）

一　寒餌ハなまりもて不分飼ひ入れいか一羽ふまくるゝを
下ツ鳥の心得にてよろし

一　塒前になりハ例え寒餌ハ一分まし七分飼ニ致ス事
但シ冬鳥先キ之通りよろし

一　飼様手当先の通りよろし

一　寒中手当先の通り寒中ハ其後ふん暖かなる所
ニ置毎日昼前ニよくあてい候事

一　種子悪しき節ハ右の餌虫類あたへ好ミを不申
此鳥へ餌ハ随分念入随分常ニ致用ル事尤

鶏卵を好きハ諸を者ニハ尤随分やわらかき餌甚候
して用てよろし勿論菜用を致ス事
右の餌鳥ハサイ掛置き候ハ始前よくなる者へ一切手
当をサイ掛程ニ致し不成事

一一一　菊戴の部　（下餌皮ムキ鮒米粉五分　五匁糠五匁）

一　寒餌鰹節ニて常々飼や但寒気至之下事尤サイ
掛ケ置ハ又ハ鳥を少キ者也有之候
生へ中蜆貝ニ上ハい家入用なり　塒前ニ至り塒中
寒中共餌ハ遊飼や一切手当共娘ハサイ掛ケ置ハ冬籠
き者ニて気を付る事水掛ケ致しニニよくき思ひ候

きむ山之ゆへ能致てとらし暑中夜分風に当るは事
よし元来格別て昼夜共暖かなる所へ置は事尤昼
前日く日本あてには事まて又元来分春へモチコし
二月三月の比別て聞かけ大切に致は事此節の
風に当りは得に至て切者なる人之得道ル而中
は事なり

一一二　目細小さし切部　下飼串鯵

一定餌鱣まてハ分餌拵前とさ元来吹もサヾイの分
並に同し内小さし切ハ黒かうふり至て好さ申は故拵
中於一日に二度ほど用てさしも尤昼七ツ夜留餌に

一数用る事
但右同しは黒かうふり分料サヾイ同様之
一元来両鳥共音出せは事かけ手当是又サヾイ同
様なり
但大さし切と閑かけ同断の肉小さし切とりに格別
気強し又黒かうふりさとに蜘蛛を好む

一一三　せんかりの部　下飼串鯵

一定餌まて六分餌但豆の粉かは事拵前こなれは定
餌に一分揚て七分餌尤千鮭先の如くよろしくして分は事
拵方元来共右同餌也至寒共に所へ居置は事

一水抔致候ニも余り深水ハよろしからす心持抔目て
致候てよし 一深水ハ余り好ミ不申候故自然まあし
い事ハ多く候へハ下係暑中抔毎日留候節至
てかろく二口計り吹水致留候てよし 尤中さハ
き不申候事
一寒中ハ随分暖ニ致させ記の如く日く昼前ニ日ニ
当てよし 勿論水抔も暑中の如く留め候節抔ニ
水浴候事悪し 定式抔ニ致候ハヽ暑中の如く是又
五日ニ一度くらいにかろく吹水致し遣てよし
一寒中音揚出させ候事餌抔常分ニちうりハつよく
心持ニ致 勿論生鰻随分宜きを用候事ニ生鰻
ハあまり大きなるハよろしからす 小サキ少ナキも
よろし 右の如くして四五日前より飼立候の如く
飼候へハ十日ほどの内ニハ音出し申ものなり
一此節ハ諸鳥ともに水致し申事抔又冬を過し春
ニなり二三月頃随分気を附け余り強く風抔当り
候ハ悪し 亀籠蔵抔ハ同様ニ此節念を入候事也
一小鳥ハ一切抔ともニままに摺え候共余り強き餌
ハよろしからす候 勿論小鳥も一切抔同じ事なり 黒ふ
うかりを好申候故やわらかなる小鳥しの如く一日ニ壹一度留

餌も共ニ数般飼ふ事には又日々少し切せんまう

ハ飼人によると一向下餌をのみ用黒みあらはるなり又下

餌ま出し飼人も有之は全く飼人の気しよると

てなり口傳有之

一一四　時鳥の部　下餌皮むき串鮒

一定餌鱣にて常々餌但塒中定而共定式同

断餌也尤塒中干鮭乃は事尤ゟ形大くは加干鮭

一分六厘ぬ用てよし又云毎日留餌ヲ生鱣皮

なきり（一）如此の大サニ薄く切寸白を飼てよし右生

鱣不用ハてト日暮蛇共口おしかくくは一切の手常がい

イ折ゝ用ゆ合併右時鳥の義夜分飛候の通ひて

あしき所よ置ハ候共あかりきし或ハ月夜抔ニは月

をしは候ニ知らてそのかきハそやゆ旧肉抔茶やりて

其し六ヶ敷事ニ而孟ヤ治しがくき物ニ而は夜分

留ニは節随分焼燈月きし不申候の通ひとろしき

但ジヒシン、仏法ソウ、筒鳥、かッカウ　峰カヘリ

大虫喰　小虫喰　此類ま多郭公ト麦色生鱣

ニ而飼ハまゝ不及候や

一一五　ヒタキ類　セキレイ類　小ガラ、小燕、野

駒之部　下餌鮒の粉

ガラス使用

一定餌鮒まで六分餌塒前ハ塒中共定餌ニ一
ト増し七分餌ニ揚ケル事尤塒中千鰯糸の如く
なる事但し鳥形篤と好なる故ハ意気まてと
し一切手当等篤と可心得ニ同断右の内せすれ
い羽小なる物ハ足弱虫多きなれや塒の節を足を痛
くるしやしれ事又云右の内白せまれハ三分餌四分
餌までもくるしからん尤トクト見ル上の事ニ而
共見立ル内ハやすら定餌ハ違わざるへし
一様子物悪き節ハ又鮒までハトくるしまざるとして餌
なる事但鶺鴒類数小なるハ蜘物好キ中ハヒタキ類

小虫ハ蜘蛛游虻ゞの虫物好中ル其へやりても悪キ節
右虫数用てよし

一一六　三光鳥之部　（下餌皮むきウナギ米の粉米出分糠出分）

一定餌鱣まで常分餌定しき同様や塒前より塒
中なる内共よく水きの千鰯入てよし餌作　右三光ま
一荒鳥物餌付鳥すとも至りて切なるへし中ニ日数
三十日も物不中者まれ一旦ハ急ニて餌付ル者て
なくしけ共右中通りニ見ニいつも餌物すれハ自然ニ
下年を持ル事をなくとりハ右一ケ年も過ル餌人ハ
至て稀なれ三ル先年三年も通り飼置たる人有

之ニ而生鱣叶鳥ニ用ひ細く至て小さきハいの
目ぶとにて切り米の粒ほとに右鱣をまぶし衣くけ
は様ニ而竟定餌ニ飼申候事ニ候得共後ハ右様な
ら飼人ハ世ニ而有る飼とと仕立候而勝手次第ニ候
一右之鳥ゟ飼立候ニハ餌常ゟとも強き心得
まゝ餌飼ハ少し出し但し蜘蛛さし餌下手ならぬ
わきまへを二つ程小さき板の上ニ置並らべそれよ
りなら程致し候様ニ押つぶし右之餌ニおしま
交て差をなすりお差ハ夜数小さき内ハ一日ニ九
度くらゐまでとらし候夕生長致し後へ出し候
てハ十度もさし又様子ニより捨ると成とも差事なし
きし餌の数ハ諸鳥共右之通ニてとらし差加減
ハ傳有り
一水を充分ニさき候様ニ同し室中を随分心ゟへぬと
致し候事

一一七　大瑠璃之部　下餌鱣

一定餌鱣ニて五分餌時前より時中室中共定餌
ニ致而揚け餌や時中先の如くニ而養生入候事又云
右餌ニて鳥丈夫ニしては油掛り漬り木を添りいなと
ニ以て致し候事様多く有之候右様の節ハ時中

寒中にても火に餌をあたゝめからし水をかけてさし
惣而菜餌強き事ハ太る也く強きハあまり肉満ハ
節にならぬ
一水浴の事寒中抔ハ別て余り強く浴る事悪
し羽毛ハ赤身へ早速てがらさす自然とあ
しハて心持能くぬるめ水ニ浴る事但ヒタキ小ツはよめ
抔水浴の事大ニ用ゆし
一一八　鶯之部　并附子
（下餌鈔の粉　附子下餌鐘いふ餌）
一定餌鈔として下餌但し囀前より囀中ニ至る迄共
定餌ハ七分揚け七分餌や囀中ニ于冬虫ときの
如く成事
一囀中ハ昼夜共強く風あつるハよろしからぬ
夜分別て気をつけて可申事勿論先ハ寄らしハ
通囀中水浴ハ随分かるく二口三口ならど吹水
ニ浴し候事囀サツまりと揚ケ候て三日も一夜ニ
一夏入ハて触るとも水浴し候事
一速く音出し候鳥ハ二日末七日とたびとはりつ
まくいれ音をもなく不申鳴出し候鳥ハ其節分ま
らく餌をかへまし八分餌など致し早く鳴はら
せ申事也据慣さんとて八分餌ハ次ニ八ヲ越ニ迄も

塒きらはり払ひ申候此義トクト承心得の事右
ハ永餌ニ揚け（口）鳴すらせ候事ちはり法たく鳴候
所へ餌を揚け飼畳候中へ引て鳥ニ取り強く
なく八日の内ニ覚夜六千声鳴候者ハ七十声ツ
ヽ毎餌を飼申候中へ音早く入候

一六千音出を出候事先ツ四五日前より定餌
ニ七分揚ケ七分餌ニ致置其日ニ至り夜飼
致し候事尤初より之夜飼五時迄ニ見せ其後五
半或四ツ時迄夜飼致し候事七日八日の内ニハ
音出し候也勿論まとひ内ニ音出し候をハ又十四五

ニ次見世不申候ても音出し不申候ハ鳥と存候
是ハ多の気候ニより候事とも

一夜飼致し候内音出し候ても其外ハ水鳴候事甚
悪しく又と勝ニ戻り音入申物ニて候是又心得
候事又ハ鳴付不申内ハ音ハ鶏とも覚前迄を目
出て其上晩出ろ鶏成る所へ置不申候事其内
ゟ音出し候て早ク鶏なる処ニ世て所へ出し
置候事不鳴出し候てもトクト未音ニ付候迄ニあか
りて引き不申候事ハ未音ニ存候ても夜飼引不
申候其余り多ク成り付きは過候音ハ（杯）あらぬなる

ガラス使用

尤ハ右様の節ハ少し水鉢にてよろし
一夜明中留め餌まるびつる虫一ツを三ツ程とまわり
餌入の上へ置候引出節用出ル事但し夜明致し
は四五日前より留餌也右出用てよし餌り沢山手角
ゆへいまゝし悪しく一日ニ一ツ程ニても夜明の節
留餌ニ明にて昼ハ留めいたし及不申候事
一附子致し候事其上親鳥座ニ静なる所へ居置
下間置て子籠居置候事親鳥の前の方へむ
け取置候事右之通りにして七日親鳥の音を聞せ
ろすり其上一向外鳥の音聞へ不申静なる所へ
置り候て是け置又七日程なるなり右之通都合
日数廿日程ニ候其上やはり静なる所へ不
け一向外鳥の音聞へ不申様ニ致し置拾五日押
付ト申候て五日程ニ親鳥の音を聞せるなり
其上右の如く静なる所へ置け前ニなり或ハ先
の如く夜明致し音を出させ是又後押付ケト申候
て五日程ハ親鳥の音を聞せてきくや此節ハ子の
音合口の不ちけいためを押付致しては又親鳥同
じ音ニ不限る不申候かなるべき事ニて随分念を可
入候

一一九　附り　野鳥餌付け様の事

一定餌粉三分位の鳥類ハ粉五分白餌ゆるくして餌の上ニ其鳥の好虫類を置て飼べし

一定餌六分以上之鳥類ハ其鳥の差別なく鱣当分の白餌なる丈餌の上ニ鳥の好虫をも置飼し

一餌付ざる時ハ三四日も過ぎ少しつゝ餌ニ青なを入れ段次第に下餌を軽く飼付なる丈諸鳥共ニ荒鳥のうちハ刻餌也

一諸鳥共ニあら鳥のうちハ薄へ入れ静かなる所へ置

一諸鳥共ニ籠中て餌付させて晴雨の差別なくはし水鉢し餌荒鳥の内ハ籠中水あるは器中籾中へ吹水ニ鉢ハ随ひ鳥移利しつかりまぜる事

一木つき類百舌鳥類ハ餌付にくし口傳有りまた常の醤油樽の塩気よく去り其中へ鳥を入れふたを致右口の穴へ餌を付置ハ目ハ樽中闇きゆへ外を見たく口へ出ハ亦早速餌付申事なり

一三光鳥并ニ燕類此へハ夕方窗口に付鳥ニ為ると並ら入口を刻て青擂して差餌ニ致ちかりむ

一なるなるとし水を飼

一　籠飼の鳥数多き叢鳥のうち患あるに粟数
飼ふへし

一　野鳥なりとも病有る鳥ハ如是く餌付まて
ヒ永く持たし殊によろし

　　和漢諸鳥飼立療治方口伝了

一　二ノ口　諸鳥擂餌加減之事

一　諸鳥共ニ擂餌拵へ候ニハまづ菜をトクト擂鉢
ニて下餌ハ随分トクト揉はけ出にまで擂水
加減よく擂まぜ一ハ米の粉入調合致飼ハ候へ

其外鶉類九官鳥抔のかくかゝる嘴ある餌のつきにさ
きらひハ鳥ニよき常の水かげん致ハ重宝悪し下餌
ハ随分揉よりけの出候まて擂ハ事ニよろしく其米
の粉入れハ上擂ハ一ハ米の揉よりけ出て諸鳥共ニ
至くきらひハ甚重まれ随分揉よりけの出ヤハ
揉て調合致飼ハ事保あるまじ　かくくませ合せハ
てハ下餌ト米の粉と行きよく不申候てハ悪し
からひハ能此節随分見合せ餌を揉手致調
合ハ専一なり　扨又摺餌は其ハまた
まち下餌と分而鶯などの擂共上下餌をかれ

摺交せ候事但虫数まても宜其品澤山
こ入れ摺餌の色ま強く見へ候事掃甚宜しか
らす候扨又大根葉ま常州拵青ミまつかひ候事九
根葉ハ格別肉をまかし青菜宜をもあしく候
何共数鳥の餌飼拵まハ定式調ぐ候品故青菜
をつかひ候常州ハ暑気の節餌早速替り申
すまて候か、切餌ハ揃とハ有ましく候かり

一　二二　塒之節飼立の事

一諸鳥共ニ定法四月中旬頃より塒ニかゝり申候
其時節ニ成候ハ四五日も前より定餌ニ一
二分気を合せ煎蝗羽根を去り細末ニし一餌ニ
交せ飼申候タトエハ鶯数の小鳥なれハ一羽ニ一分気
入飼申候鳴鳥も鳥くらひ鳥数拵ハ又ゝ鳥形大きく
餌のかさミをまし候故二分気入れ飼申候尤右ニ
なじ二度餌の節ハ右をまぜ候二度ニ不入飼申候
右煎蝗の切餌ハ肉を暖め精力をまハし候故格別
毛羽沢山ニ落し塒揚け早きなり塒の節用
候ゆゑは扨又嶋ひよ九官ぐさひ鳥なとく鳥
黒丸うたせ候鳥ハ生蝗随分与へヤヽカラなる
をとく時の所計り一匁二分ニ切り毎日留餌ニ二疋

ほして其餌入の上へ置飼申候但鶉雲雀抔ニも右
の如くして飼ひ候もよし志かし未た有り余蟲ゐ様ニ
へハ好きらや志れ申さし錦鶏雛（子）白鷴志やう、せそ
らん抔からくみ孔雀抔ハ別て生蟲羽根足させ
り当餌の節其侭まて飼申候也錦鶏雛子歟
まハ毎日五ツ六ツ程宛飼やかうくん孔雀抔ハ十
二三程宛飼てよろしく候右蟲用ひ候事小鳥
数の餌ニ摺交せ候とも生ニて飼ひ（切）時をつねり
ニ揚候て余蟲ハ刻申候事勿論餌ニ交せ定餌
ニ下ケ申候事

一二二　水浴之事

一諸鳥ハ其年三月上旬より定法（切）時の節ニ
なり候ハヽ三日置ぐらいニ一度ツヽ程ニ水浴申候
定餌（法）（切）時の節ニなり候ハヽまつし水浴し候前ニ少
のうち日ニ当て其上ニて水浴申候尤暑さ強き
候てハ随分よろしく候ハヽ水浴の間へ不少のり
す目（日）ニ当て水浴し候事宜候ハヽはり（切）時の心まかせ候水
しかてハ暑気の節故ニ外家へ入置申候てよろ
しく候まゝ余程毛落し候ハて又五日置
くらいかつく（口）浴水致申候血ぐさ抔ニてハ別て

ガラス使用

水すそく随ふ鳥の羽の赤あり左様ニ二三
日ほど薄く吹水抜けてよろしく候も薄き
節故水の水を平日余程あて候時ハともし鳥
ハなべてもはしく赤ミ出かゝりて自然の病出
来り候ハ其節ハ早速ニ病気不申候故久てハ
捨置き申候ハ次第ニ増長致して肉落餌
喰ても悪しく相成長き事と申病ニ相成申候
成早速ニ落申者ニ得共左様なり候て
ハ何程手入致し候ても中々治しがたき者ニ候十ニ一
一旦取直し候事をみるハ出来或ハ節の作りめ抔何

なる時ハ右の病出て日毎少落申候　扨又水浴ハ
節心得て早速ニ手入致し治り申候共是ハても
強く水肉へしミ入候ハ長くハ持不申　扨又有ニ年
内中ハ年内抔随分能持候ても翌年の塒ニ至り是
非中々出て塒過し不申候者ニ候　扨右塒中ニ水
致ハ強く能く心得る事　扨又秋風ニ成申候事ハ
出節より右申候も落く節故宜き風ニ当
り候てよろしからぬ故随分次第ニ当て不
申候様致し置て塒をあげ候てと日数廿日計
りの内ハ猶更大切ニ随分次第の当らぬ不申候様

ガラス使用

殊ニ暑て事ニ依て鈍ク成常ニ而ハ殊ニよろしからぬハ筆
なり宮と云ハ籾又鳴ひとぐひ七ひ鳥数声呼取
籾小内ニて蝍をとく五日来まなりいても来よ
なりゆてとも未だ蝍まかりゆ様子あらんく不申候
ニハ又ハ毎日ともすこしの内日ま常ニて能程ニ水あび
せゆて其上ニ家へ入置ハ開方も有之ハ右鳴ひ
と云ハ籾とこと上之の呼取扱まて蝍ととも鳥ます
随ニ石の飼方よろしくハ見え又やまず蝍の
心まてゆ併小鳥の取扱鶯抔ニ別て慈悲小鳥ニ候
ますよろしからハ右鳴ひ鳥ニ付声呼ニ候

とまり餌桶も設しかりゆへニ家等先の如く水
呑く吾置ぐらいにかるく吹水を致しい事ゆへ
籾又蝍トクト揚ゲ尾羽共まとめありこのひ掛
ゆへし又を何まとらは諸鳥共ニ水遣之三日置
位ニ益前の内熊桶ニ水致ハ事無之節蝍揚け
て大切ニ候共水遠くゆていニ出抔ムナゲナド喜
れ鳥形とくらしくあ其ニ水進（たつ）く致ハ併天気
あなれ雷日抔雨天抔の節ハ様子見アリハ宜可
其節別て冷気ニ当てハよろしからハゆ日水
遠く成りゆ共用捨まさくし天気まさくゆて三日

置候て昼前の内随分致 水浴候事無之様ニ浴せて
冷気つよき時ハ朝七ッ頃ニ致させ又ハ五日置くらい
浴せ致候事其節ハ最早追ミ寒中の事故は
相止申候事

一二三　寒中飼立の事

一諸鳥共寒前ニなれハ十四五日廿日程前ゟ又ミ
定餌ニ一二分宛も増申候尤時候ニより一日も前ゟ
寒ニ付申候寒中ハ万端其節とりと用心餌を足
昼前迄の内ニ出し候事一日当てづめニ致置候ハ又
よろしからす候ハ昼過とも日かけの随分暖なる
所へ置申候尤水ハ廿日置くらいニ随分暖なる
日當前の内致申候ハ鳥自然とあらひ候て随分と
わしく候時中少遠ひ其節ハ次第候てもトクト
水致候てよろしく候尤寒中深水ハ四五寸ニ悪しく
心持ちよきへの餌致候事扨又火鉢抔かけ
事炭火抔入候て余り強く候ハヽ又てとる
しからす候ハかタドンの火よろしく候併なから雪
ふり候節なとハ強く致申候て又ハ炭火を
よろしく候事大がいたどん火ニてもよろしく候尤
日中の内ハ火鉢置候ても及ひ不申候晩の内夜分

ガラス使用

別して入置候事ナ姉妹なんどゝし長生錦鳩音
呼数大鳥まて鶴雀右のごとくハ暖に國巻せ抜たるく
くさをまけハ抜随ひて外鳥ともに抜別
気をつけて手入界致ハ事を時鳥ニ衰へ小鳥類
抜とまき右の如くに随ひ暖に致置て右の
如く寒中とても手ぬけなく餌かけ置て入ハ明年に
なりも勢鳴る強くさへも早く付ハ右抜別音
を早く出しハ其故念に内随ひ手ぬけなく
聞つけハ事肝要也

一二四　四季水の事

一春の水ハ味すゝし水色青し寅の刻の水を汲用てよし

一夏の水ハ味にがし水色赤し辰の刻の水を汲用てよし

一秋の水ハ味甘し水色白し未の刻の水汲用てよし

一冬の水ハ味からし水色黒し巳の刻水汲用てよし

一井花水四季共ニ寅の一天ニ人の汲ざる前を汲用てよし

暁天ニ井花咲時ニとや依之井花水といふや
右水の事をか様ニハ用候事なく候共水の
代りめニ水あたりか事なとなきしたる事ハ数々し
鳥気なとを随分かわり候書もなく候得共事ニも
其鵄鳥抔ニハ青いろを好むの定芸候事抔と承
候ハ多く鷹駒鳥抔ニありたる候者ニ左様ニ節
早速外鳥の替と時ニ志づかなる所ニ出し志まら
く鳥おち付て薬用致候事早速薬用致候て
ハ悪く候事

一　十二五　鳥とらへ様の事

一鷲の内の鳥をとらへ候ハ先泊り木のなき鷲へ移し
候て右ニ手拭を志めし候て鳥おどろかさる不申様ニ落
くらき所ニて右手拭をひろげ手ニ持そへて背の肩
よりおさへ申候随分心静ニとらへ申候事かんじん
やあかるき所ニて其まゝ外の鷲へも移しさば
とらへ兼候ハ抔の上ニ居候鳥ハなくして鷲のすみへ
爪をからみぬけ候事抔あるへしあらけなき抔ハき
けまて胸打候事間ニ有之候まゝ随分右の如く
まして静ニとらへ申候、尤右ハ文鳥雛抔熱
依ニ鷲なれ不申鳥或ハ小鳥抔とらへ候まゝ

ガラス使用

物置をかり候て其中まて鳥をはなしさきくの
如く致し候へハ如何様なるあらき鳥にても怪我な
く候事也尤それ少し諸鳥共右如く致候へハ
於此ならし候得ハ数多き杯より扨候ハ為てあ
らき鳥にてもとらしめ随分さきの如外籠へ
移しくらき所まて少しハ宜てならし候事庭籠
へまなし置鳥を揚候てもやはり右の気とりまて
庭籠内へ入れ移し籠等用ひ致しなく少し鳥
の居付け如きを見定め其上戸を立くらく致し
て随分心静ニ籠まて仕せ候事庭籠の内

まて喰水致す籠へ移かへ其上まて出し候事錦鶏
雉子類杯も右の如くまして揚候や猶又孔雀鶴杯
ハ大鳥故籠まてハ仕らぬ申故大なる風呂敷
まて揚け候やはり右の如く随分静ニ籠へ
入まて戸口ニ立て置左右へ又ハ直とらへ候故
鳥のさきをとらへ定前を向候時ニは早く戸を立
てくらく致す右風呂敷をひろげ少し脇の方より
手ニ持そへて脊中へ打かけとらへ申候事間合悪
くハ鳥立あがり申候故随分尺候てとらへ
此事なり口傳

ガラス使用

二二八　はつき揚げ様の事附り打様の事

一ききの如くぬれ手拭まて四ツにかりしにいたし
手の内にて鳥を身持さセ不申様ニ致片足
づゝ出し揚け申候まつとくとまで随分と浴
ときはずきとまり候へば真中よりすじ付両方
へ分け申候上小さき竹箆にても随分よくゝへ
さらさ不申様にしつくとおろし申候へは心よくと
れ申候又如しやうに細にて年々揚け不申候ハヽ
二枚も三枚も古き年重り居申候物ニは右様
なる鳥ハ随分古きをはなく取てことし取候迄
抜とまり候の油よくとつけ申候事但何れとは
なく揚け候て抜とまり候油付候事又ハ古毛
なき揚け候事年々時々揚候事ニ候年来
揚け不申二枚も三枚も重り居候ハヽ打捨
置申候へハ鳥も抜けずしてまれ痛出候事
抜有之候故右様なる鳥ハ何時にても早速
揚け候をためしく候爰をよくはずき揚け候
節と少くまでも足元の気味合有之鳥ハ熟
気有之候故右はつき身共へ拵なら付居申候
故とれがたく候右様なる鳥ハよくゝ薬用致足気

ガラス使用

迄ちハ上まて揚申候事也如此揚け候へハ下
皮まて所て上り申候て肉出て甚痛候故小鳥ニ
ハ痛よわかされて益申候よう心得へき事故
又爪打候ても又かしこくとらえ申候得ハ志ん中通
り此中頃まて細く赤き筋見へ申候右赤き筋
の所まて切候得ハ血出申候是又能く心得置
き事

一二七　羽ぬけ様の事　附　足ぬき様の事

一右両様共ニ昔ゟ羽折れ候節心得て早速
療治致候事時遅てハ療治叶かたく候
故まつ早速鳥をとらへ折れたる所の毛ほ祢よく
とり合せ候てしはらく暖らしもむし其上ニ
祢りつぎ薬をつけ柳の若き所のかわをむき
よき程ニ切りて右折たる所の上をまき申候
て其上を細き紙ニてくゝし糊をつけ随分と
くまなく不申候様ニ二三度ともまき申候事
右羽つき候所と白柳のかわにて巻かたく
有之候ハ右の如くとくと骨出合せ候て薬を付
柳の皮をまき候かたく所なれハ布切れニて右出
合せ骨のくるい不申様ニくゝりとめ候事其上羽

ガラス使用

つまひを糸にて之をつけ置候事也其様子ハ左之
如様成し有之候依て強く折こみ候ハヽ左様ハ右糸
の目先にくゝり候て下ケ候ものてもくゝり置事也
有之候ハヽ右の如く早速療治いたし候ハヽはげ
候者も然ル處羽つまり候ハ不揃多く大頭候者故
不揃出合共候様羽つまり様抔悪く候ハヽはげ候て
立下り羽抔まかなり元の如くなり不申物に候
候故よくゝ心得有之事也右羽の持り様
柳の皮にて巻候事口傳有り

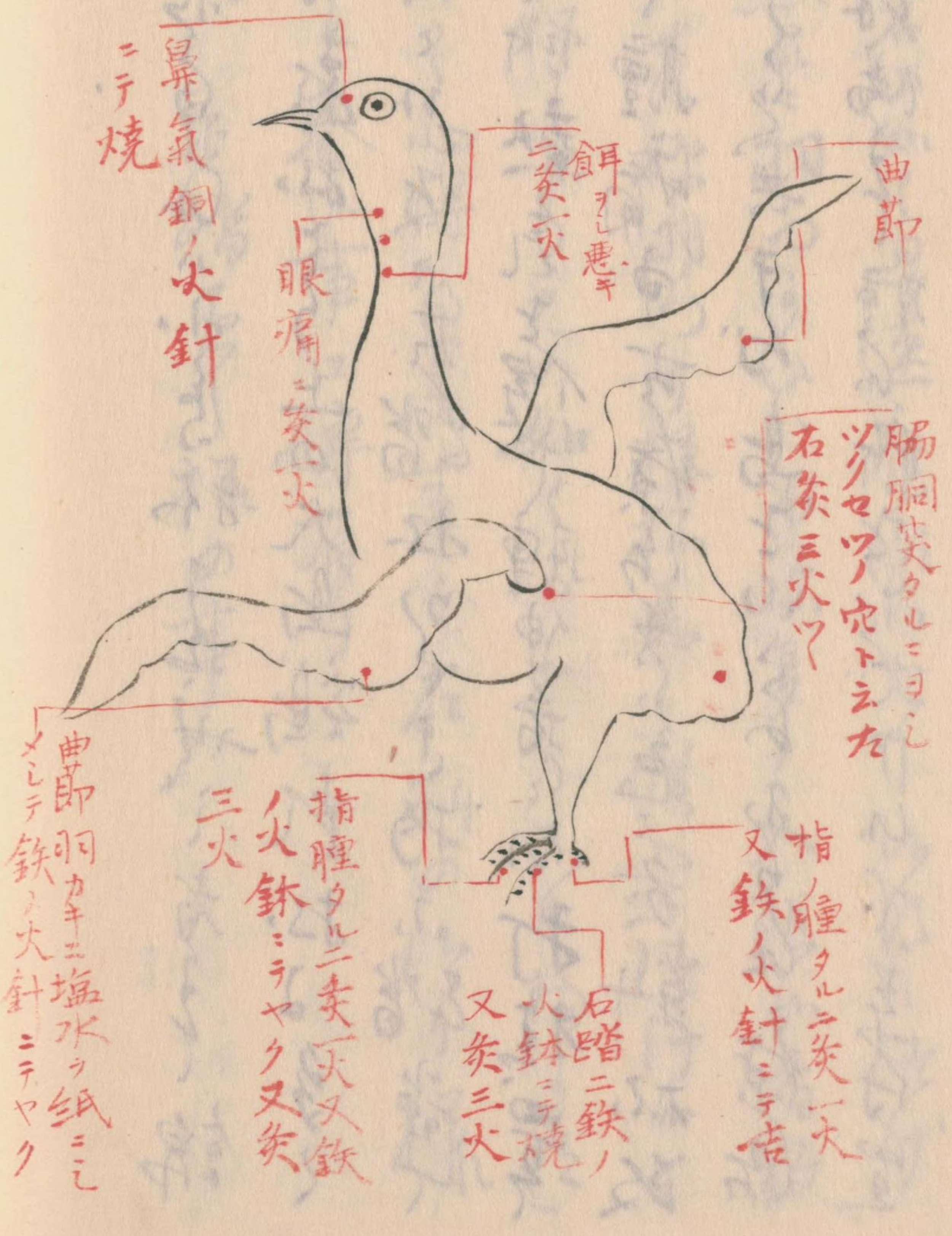
一 二八 不踏出来様の事

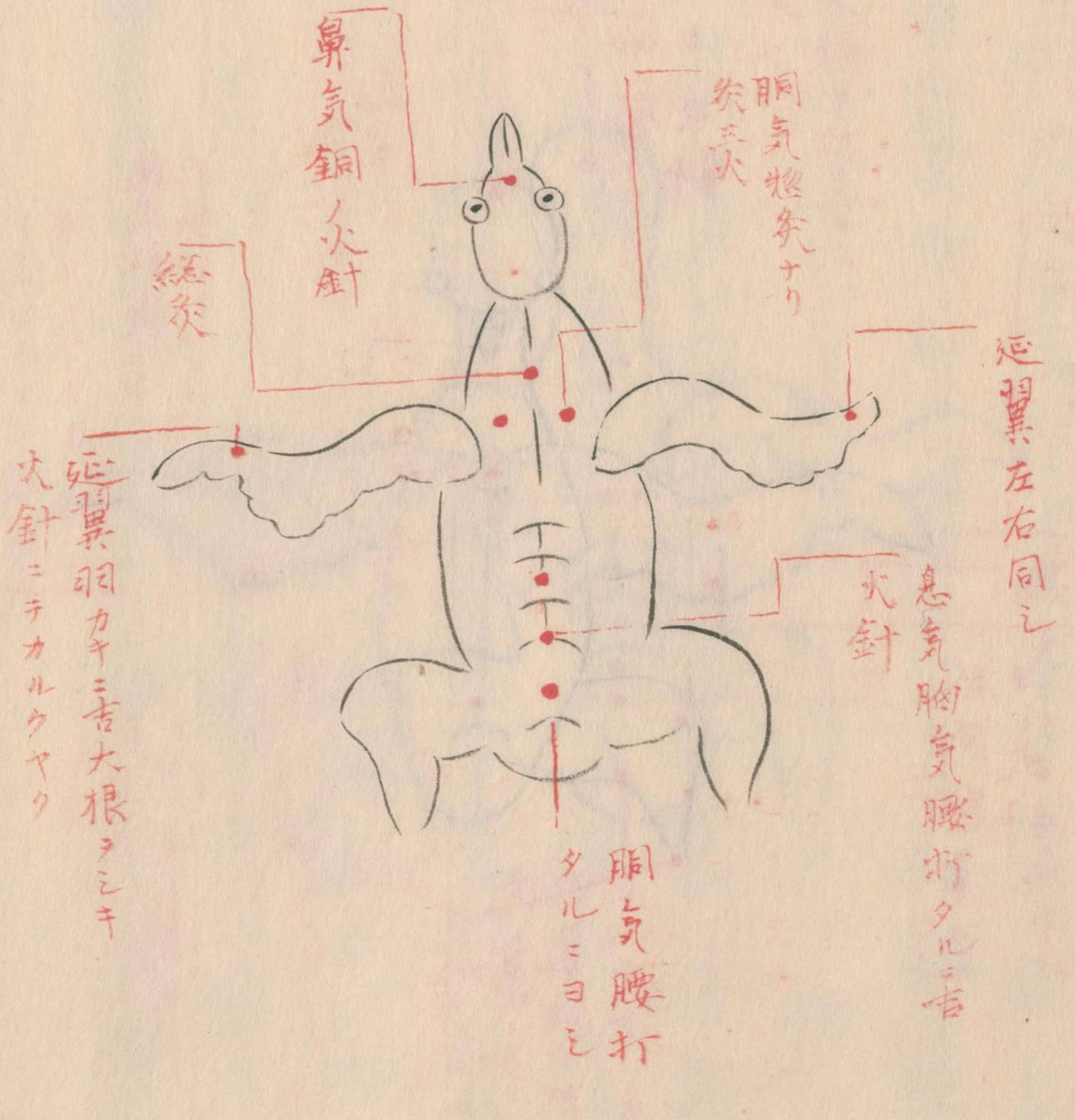
一 右不踏候申候ハ小鳥抔までも御座候者ニて錦
鶏雛子其外より上の大鳥鶏其外より多く
有之候者ニ候夜ニて一両踏抔のかゝき物ニ不踏當て
出候ハ右之所熱気を催し腫申者ニ候打捨置て
ハいよく腫痛申也療治方ハ色ニ灸針抔致
し候てもよく候共まづ鳥をいためぬニ療治
或ハ白湯にて腫候所をたでやい候て薬付置
候へハよろしく候右の如く三七日の内ニ療治いたし候
得ハ大かたハ直り申候者ニ候右の通り致候ても
直り兼候ハヽ灸針等致候て宜候則灸穴の

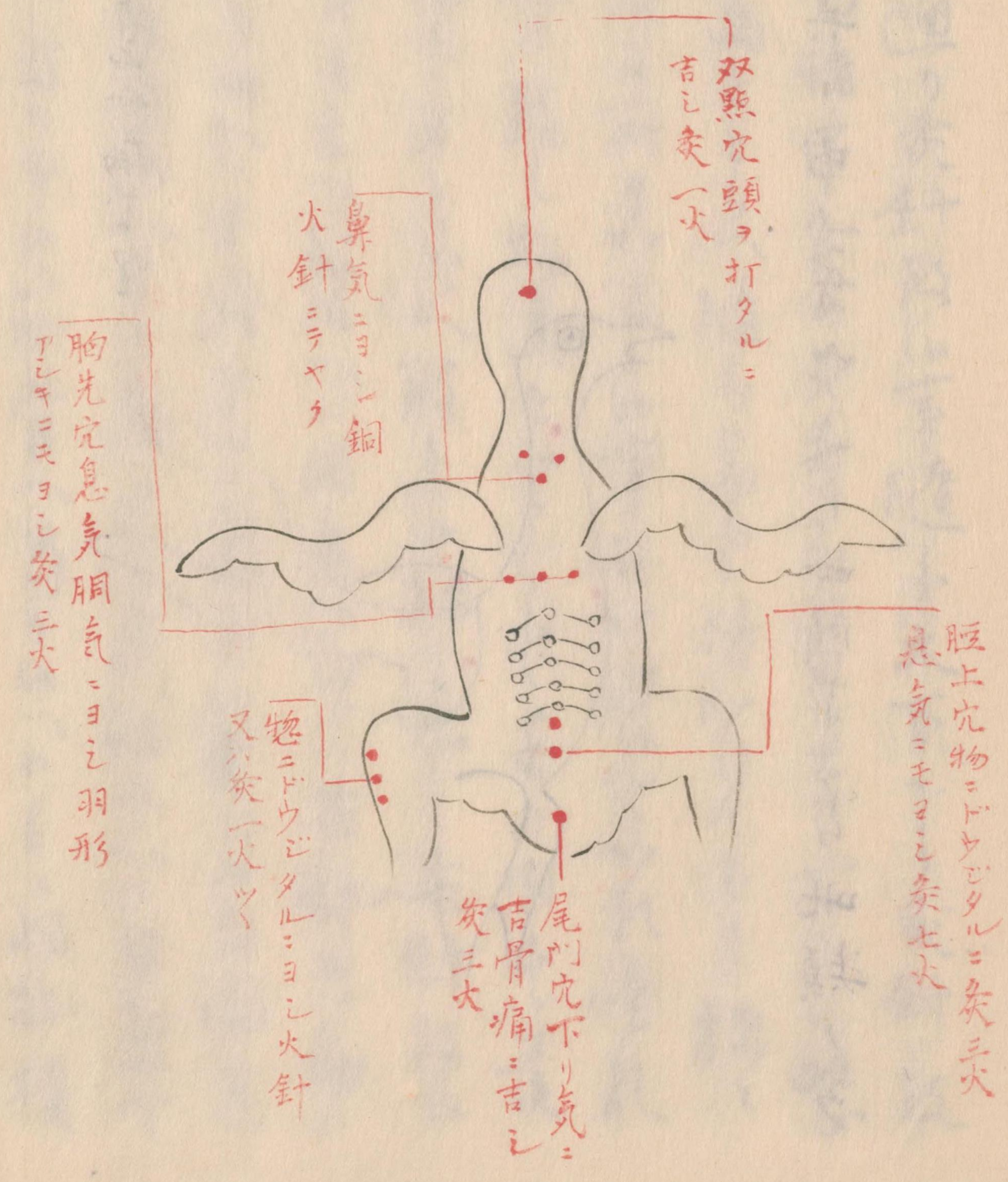
ガラス使用

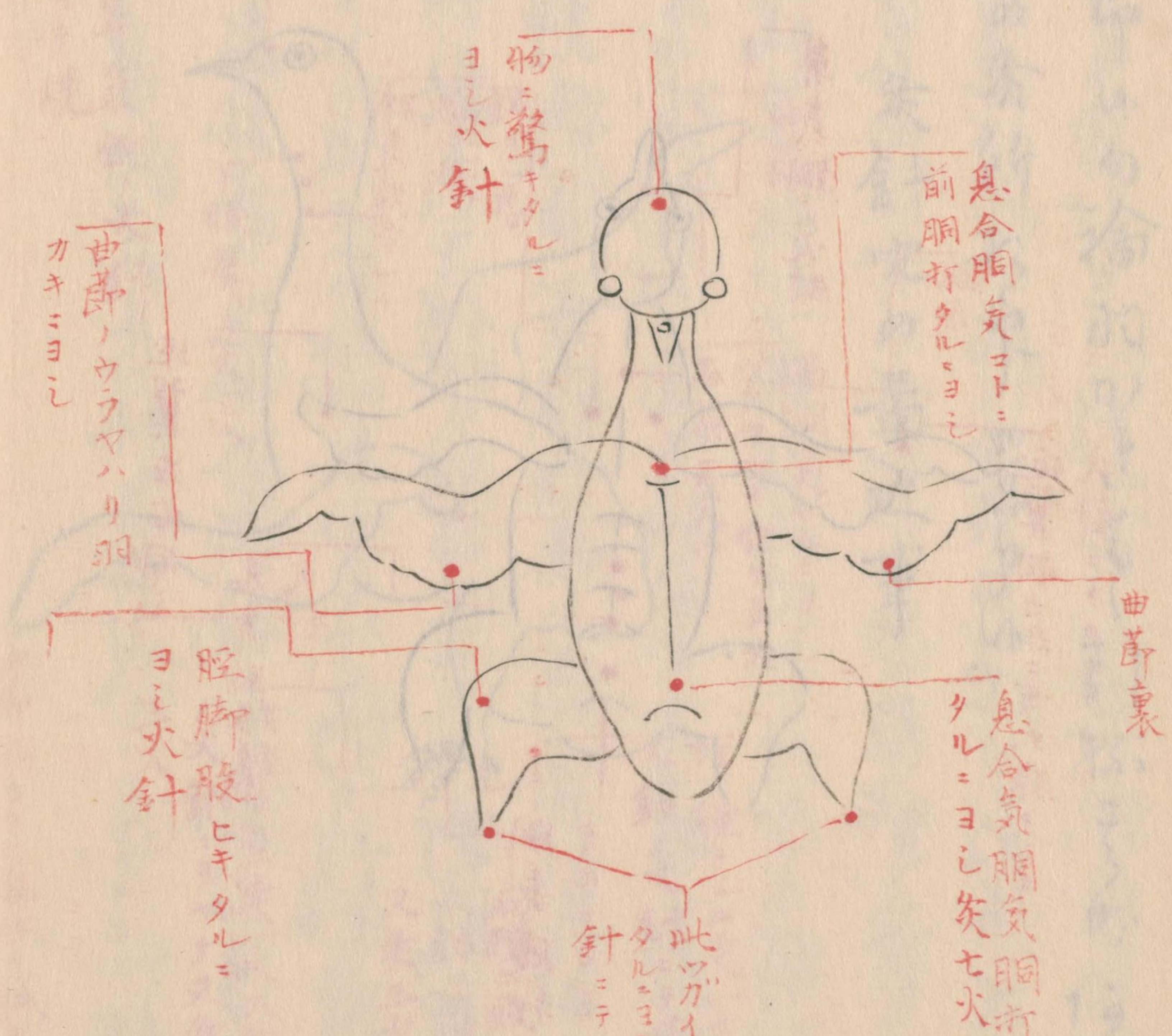
図左は此印にて論羽かきにまて引掛こともか なら
まし諸鳥の灸所如此 畧也

一二九 灸針穴の図之事


曲節
腸胴変タルニヨシ
ツノセワノ穴ト云ナ
右灸三火ワ
餌タレ悪キ
ニ灸一火
眼痛ニ灸一火
鼻氣銅ノ火針
ニテ焼
指腫タルニ灸一火
又鉄ノ火針ニテ吉
石踏ニ鉄ノ
火鉢ニテ焼
又灸三火
指腫タルニ灸一火又鉄
ノ火鉢ニテヤク又灸
三火
曲節羽カキニ塩水ヲ紙ニし
メシテ鉄ノ火針ニテヤク

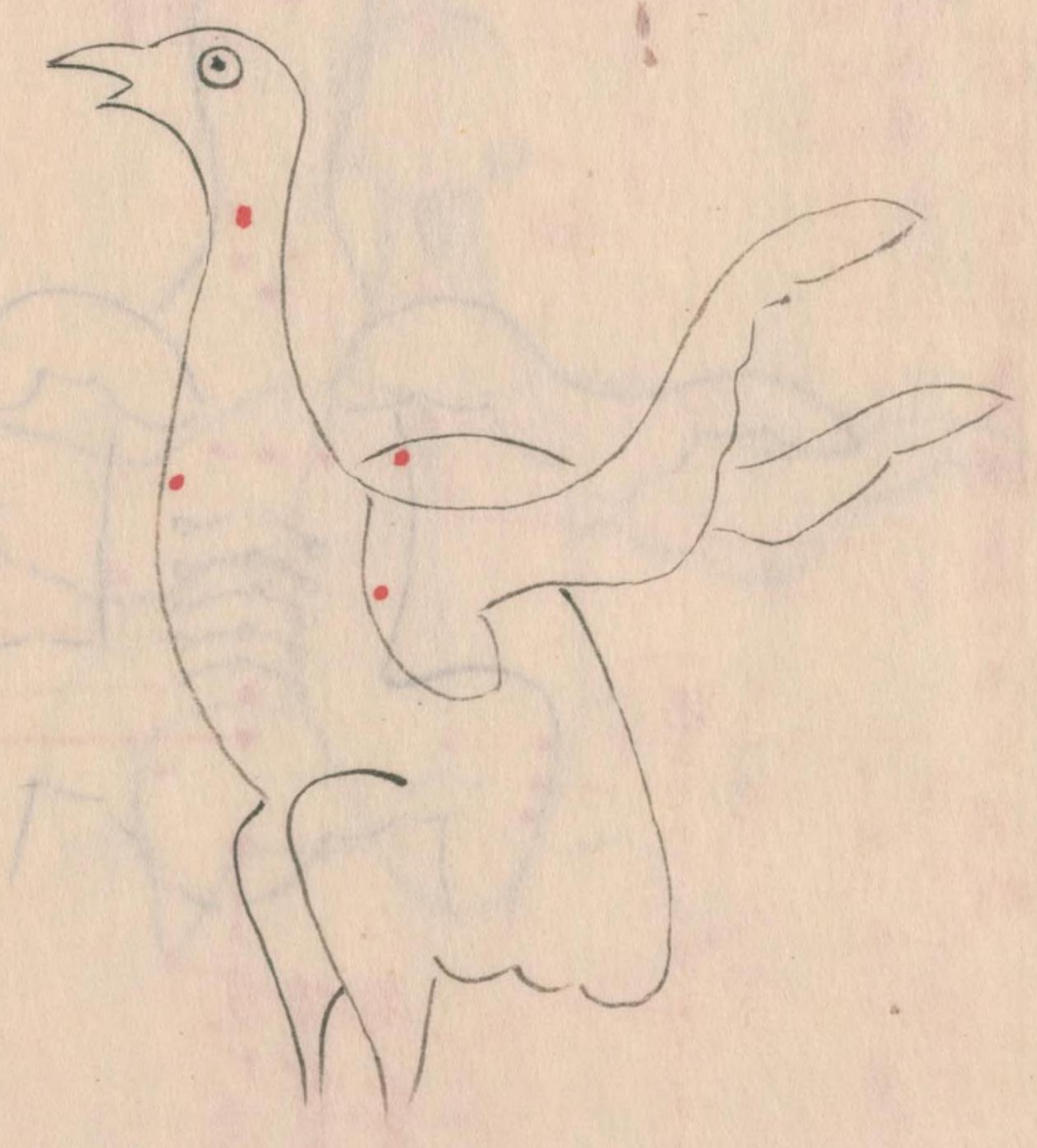

延翼左右同し
息気胸気腰折タルニ吉
火針
胴気悩灸ナリ
灸三火
鼻気銅ノ火針
総灸
延翼羽カキニ吉大根タシキ
火針ニテカルクヤク
胴気腰打
タルニヨシ


双顋穴頭ヲ打タルニ
吉シ灸一火
鼻気ニヨシ銅
火針ニテヤク
胸先穴息気胴気ニヨシ羽形
アシキニモヨシ灸三火
惣ニドウジタルニヨシ火針
又ハ灸一火ツヽ
尾門穴下り気ニ
吉骨痛ニ吉シ
灸三火
脛上穴物ニドウジタルニ灸三火
息気ニモヨシ灸七火


物ニ驚キタルニ
ヨシ火針
息合胴気コトニ
前胴打タルニヨシ
曲節ノウラヤハリ羽
カキニヨシ
曲節裏
息合気胴気胴衝
タルニヨシ灸七火
脛脚股ヒキタルニ
ヨシ火針
此ツガイヒキ
タルニヨシ火
針ニテヤク

ガラス使用

タウト云小病なり



両羽共ニ内ノ方やくべし四所なきなら此類ノツボ也

右図の通り灸針致候事随分大事なり灸針致候ても諸事灸の見等不自由なるときやりよく整候て相鳥をとらへ随分篤と持かけんとき様に致療治は所りかたく候事云かけ候てかれ是れなき様ニ致し相鳥を能くし手の関を落付せ随分身ともに致させ候様ニ出し灸針致候事鳥身ともへ致候へハ図書して灸針共筋骨へかゝり候へハ毛羽なやみ候じ候者云ふ勿論其往ほと居るといへとも鳥ハ身ともへ致候へハ留意筋骨へ少もり申候筋骨へ当たち候へハ良く相私損

じ候所能〻心得置べき事

但灸針療治ハ大き鳩位の鳥ゟ上の鳥ニ致し

候鳥数ニハ灸針致し不申候鳩数ゟ下ハ

小さき鳥の故灸針致し候得ハつかれて悪

ク候事へ於ハ的塩薬用ひて宜く候

一 三口 巾針の事

一右巾針の事随分諸病ニ用候得共筋骨

肉抔へ當り候得ハ至て悪く有之候故手練な

くては致かたく候故まづ致し不申者ニ有之

候併中風腫抔と申て皮肉の間ニ風をふくミ

候抔ぶく〳〵ふくれ居申候病ニ有之候右中風

腫抔ニハ巾針用ひ候得共是ハ遺候抔大切ニ

候故松葉を以て針の如くにして糸をつけ置

候所を引通し候右糸を得と志めし梅干

の黒焼細末ニして右糸へぬり引通し申候事

右松葉ニて致し候得ハ少く肉抔やぶれ候てもさ

しつかる事ハ無之候物ニハ鉄ニ而ハ少しの事ニも有之

候故松葉艸をきひ申候併し是とても大切ニ致候事

而右之如く致候得ハ風腫抔たゞふくれ候斗の病気

ハ随分治し申候又ハ中風も全快ニハあまり無し病ニ

ガラス使用

候鶏かず閉ニ首ニは右中風いたされ候ヘ首筋引
詰申候病ニ而故そこへる所ハ治し候得共筋詰
候ニハ右療治いたし候而も申候筋元ニハ色ニ灸針
等ニ而候共いたさせまじく事ハ如く此鳥故灸針ニハ致
かたく成かたし其上ハ中風ニ而相成候ても治しがたく
き若ニは百心得候事多く尾筒の上ニ一穴也
申所なしハ右中風筋気絶申針致候てよろしく候
得共申針へきまする申ハ如く手練なくては致かたく
候故則松葉を以穴へ打候事是又よろしく候
事ニ傳

一三一　腸気息合之薬の事
一人参　細末ニして　一川芎　右同断
一菜師艸　右同断　一製法甘艸　各等分
右水ニて用てよし
一三二　水当り薬の事
一田にしの陰干細末にして　一天瓜粉
一製法甘艸　少許
右三品を水ニてとかし用てよし
一三三　疱ニ腫候節用申薬の事
一辰砂　三分　一ケンポナシ　黒焼　一分　一製法甘艸　少々

右水にてとき用てよし
但早速の療治には女鳥に合せ候得は生治し申
候ても合せぬ時は傳有之
一三四　毛替り候節用ゆ薬の事
一生鐘　黒焼にして　一糀　ともに等分に合し
右各等分に細末にして水にてねらして一廻り用て良
妙なり
一三五　爪ぬけ血留薬の事
一天蓋粉
右血を拭てふりかけ候得は倏ち血留る事妙なり

一三六　下り気薬の事
一千鐘の粉　一かたぐり　細末にして　一カえうりの根　同
一人参　右各等分に少しかゝる
右水にて用る大妙也
一三七　下血薬の事
一ヒルモの陰干　黒焼にして　一鰻法甘草少しかける
一三八　豆腫に節附け薬の事
一天南星粉にして　一赤辛螺　から黒焼にして
一麒麟血　細末にして　右各等分
右水にてかいて附てよし

ガラス使用

一三九　様子悪敷節用る薬の事
一肉桂細末にして　一辰砂　右同断
一茯苓に　一龍脳に
一人参に　一天瓜粉に
一製法甘草少しかく
右水にて用てよし
但諸鳥熱気薬病窟を用てよし

一四〇　餌喰悪敷節用る薬の事
一焼ける蛆一疋　一蓮肉（細末にして少し）
右餌に指交飼てよし

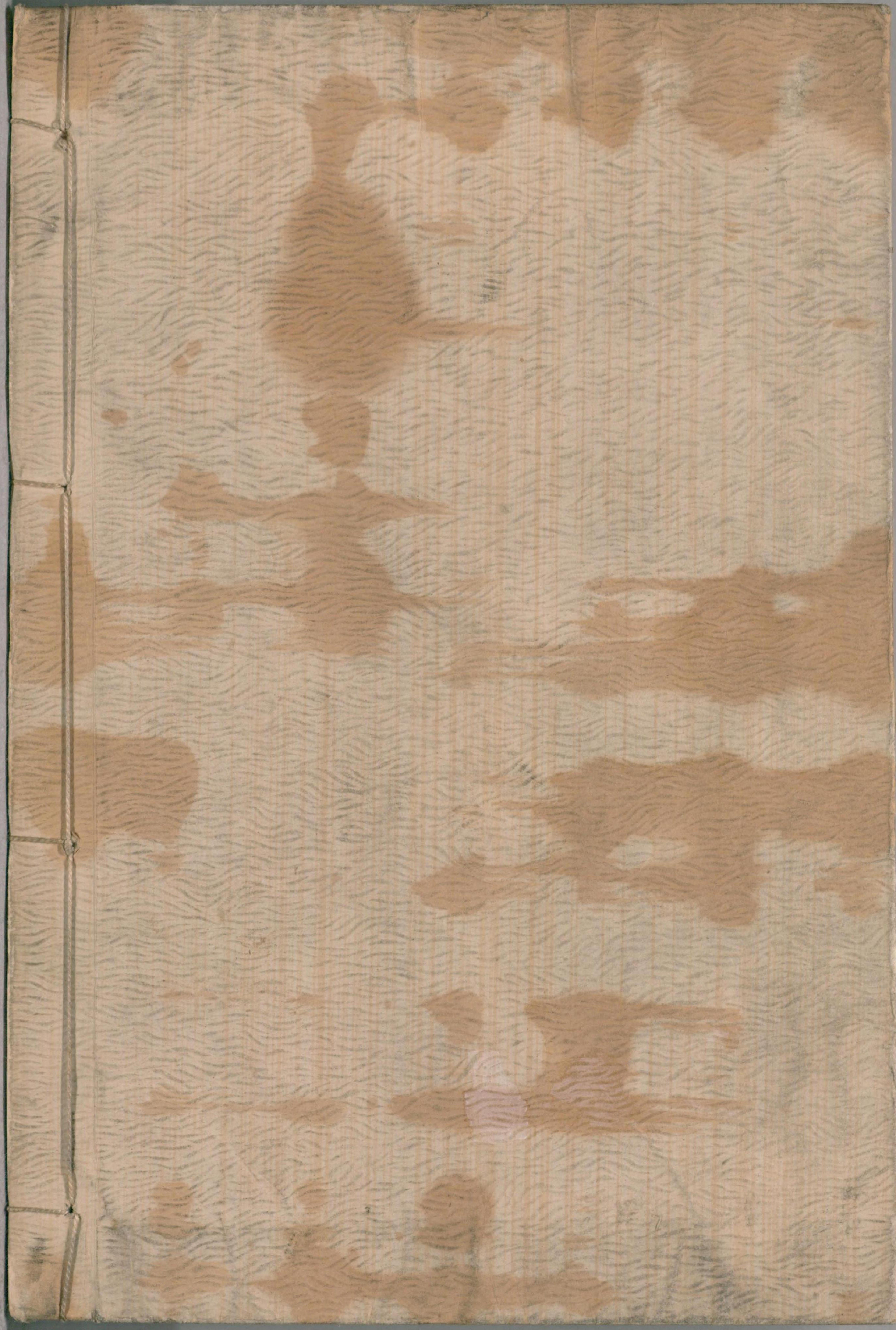
和漢諸鳥飼立療治方薬終り
右諸鳥飼立療治薬法の書は懇望によつて秘本
口傳悉新小組立一書となせし者也
諏訪流薬法之書　定餌は元唐鳥菓子の書
右者家法之書
和漢諸鳥定餌口傳飼掛数分け之書
和漢諸鳥口傳書
右は秘事口傳之所新に調ぶる書也
右和漢諸鳥飼掛極秘は大阪屋善蔵悉傳来
なり依て他見と堅く不許　右此書大冊数巻有而

ガラス使用

火雛之秘有之依て今小春迄おまもて者也

和漢諸鳥口傳書　終り

特1 1980



ガラス使用